

---

土地分類基本調査

---

横須賀・三崎

5 万分の 1

国 土 調 査

神 奈 川 県

1 9 8 4



三浦半島南端 三崎海食台地にひろがるダイコン畑。

台地（台地面は三崎面，M2面）と台地にくいこむ谷底平野の間の段丘崖は植林によって保護され合理的な土地利用になっている。

（昭和59年）

## 序 文

本県は、全国土の0.6%の土地に総人口の6.1%（昭和60年度）、740万人を超える人々が住んでおり、人口密度が全国平均の約10倍という高密度社会であります。県土は県民の生活や様々な生産活動を行う場ではありますが、それぞれの土地が固有の自然的特性をもっており、私達の生活に大きな影響を与えています。したがって、県土の利用にあたっては、県土の自然的な性格を十分に配慮することが必要であります。

このようなことから、県土の自然的な実態を科学的に把握するため、国土調査の一環として土地分類基本調査を実施し、土地利用関係の基礎資料とすることといたしました。このたび「横須賀・三崎」図幅の調査結果を取りまとめましたので、地域の土地利用諸計画の基礎資料として、広く皆様のご利用をお願いいたします。

なお、本調査の実施にあたり御協力を頂いた関係各位に深く感謝申し上げます。

昭和61年3月

神奈川県企画部長

関 山 泰 雄

# 目 次

## 序 文

## まえがき

## 総 論

|        |   |
|--------|---|
| 1 位置   | 1 |
| 2 行政区画 | 2 |
| 3 人口   | 3 |
| 4 産業   | 4 |
| 5 交通   | 6 |
| 6 まとめ  | 8 |

## 各 論

|            |    |
|------------|----|
| I 地形分類図    | 9  |
| 1 地形概説     | 9  |
| 2 地形地域区分   | 9  |
| 3 地形細説     | 11 |
| 3.1 山地・丘陵地 | 11 |
| 3.2 台地     | 11 |
| 3.3 低地     | 13 |
| II 表層地質図   | 16 |
| 1 表層地質概説   | 16 |
| 2 表層地質細説   | 18 |
| 2.1 固結堆積物  | 18 |
| 2.2 半固結堆積物 | 22 |
| 2.3 未固結堆積物 | 23 |
| 2.4 火山性岩石  | 25 |
| 2.5 温泉及び鉱泉 | 25 |

|                       |    |
|-----------------------|----|
| Ⅲ 土 壤 図               | 27 |
| 1 土 壤 概 説             | 27 |
| 2 土 壤 細 説             | 28 |
| 2.1 山地・丘陵地地域の土壌（林野土壌） | 28 |
| 2.2 台地・低地地域の土壌（農地土壌）  | 29 |
| Ⅳ 土地利用現況図及び土地利用履歴図    | 34 |
| 1 土地利用概説              | 34 |
| 2 土地利用細説              | 36 |
| 3 土地利用の履歴             | 42 |
| Ⅴ 自然災害履歴図             | 44 |
| 1 自然災害履歴概説            | 44 |
| 2 自然災害履歴細説            | 45 |
| 2.1 地すべり              | 45 |
| 2.2 崖くずれ              | 47 |
| 2.3 浸水                | 48 |

# ま え が き

- 1 本調査は、国土庁土地局国土調査課の指導を受けて、神奈川県が事業主体となり、昭和59年度に実施したものである。
- 2 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿に、神奈川県が独自の調査項目として土地利用履歴図及び自然災害履歴図をつけ加えてとりまとめたものである。
- 3 調査の実施機関及び担当者は次のとおりである。

調査実施機関：神奈川県試験研究連絡協議会土地分類基本調査専門部会  
(会長 見上敬三 横浜国立大学教授)

担当：

地形分類  
表層地質  
自然災害履歴

(神奈川県都市地質研究会)

|                |       |
|----------------|-------|
| 横浜国立大学教授       | 見上敬三  |
| 〃 〃            | 長谷川善和 |
| 〃 〃            | 小池敏夫  |
| 〃 講師           | 加藤磐雄  |
| 〃 助手           | 江藤哲人  |
| 〃 〃            | 尾崎公彦  |
| 県立大和東高等学校教諭    | 奥村清   |
| 県立博物館専門学芸員     | 松島義章  |
| 〃 主任学芸員        | 今永勇   |
| 〃 学芸員          | 平田大二  |
| 県立教育センター研修指導主事 | 相原延光  |
| 平塚市博物館 学芸員     | 森 慎一  |

土 壤

|         |        |         |
|---------|--------|---------|
| 農業総合研究所 | 土壤肥料科長 | 鎌 田 春 海 |
| "       | 主任研究員  | 藤 原 俊六郎 |
| 林業試験場   | 専門研究員  | 鈴 木 清   |
| "       | 主査     | 越 地 正   |
| "       | 主任研究員  | 尾 岸 諒 一 |

土地利用現況

土地利用履歴

|         |       |         |
|---------|-------|---------|
| 温泉地学研究所 | 所長    | 大 木 靖 衛 |
| "       | 専門研究員 | 小 鷹 滋 郎 |
| "       | 主任研究員 | 長 瀬 和 雄 |
| "       | "     | 杉 山 茂 夫 |

総 括

|           |  |         |
|-----------|--|---------|
| 参事兼企画調整室長 |  | 天 内 宏   |
| 企画部総括企画主幹 |  | 藤 崎 英 輔 |
| 企画調整室 主幹  |  | 加 瀬 昇   |
| " 主任主事    |  | 松 藤 静 明 |
| " 主事      |  | 金 子 真理子 |

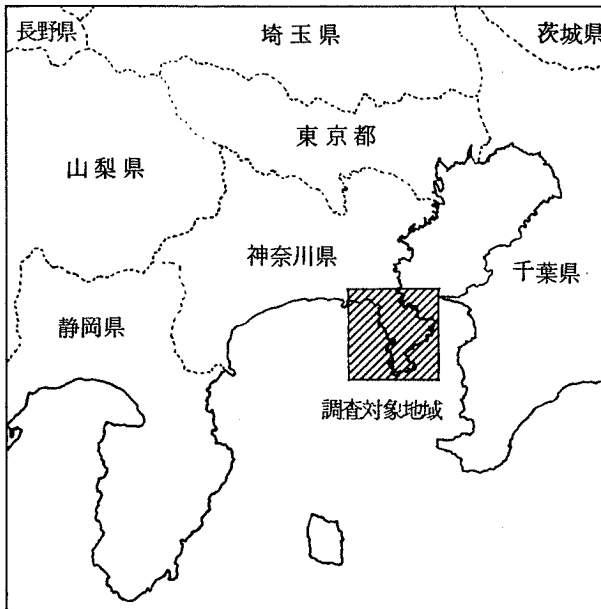
# 総論



# I 位 置

本調査対象地域は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「横須賀」図幅及び「三崎」図幅を合わせた地域であり、神奈川県南東部に位置する（図1）。東側は東京湾に、西側は相模湾に面し、三浦半島の全域を含む。調査対象地域の範囲は、東経 $139^{\circ}30'$ ～ $139^{\circ}45'$ 、北緯 $35^{\circ}7'$ ～ $35^{\circ}20'$ である。

図1 位 置

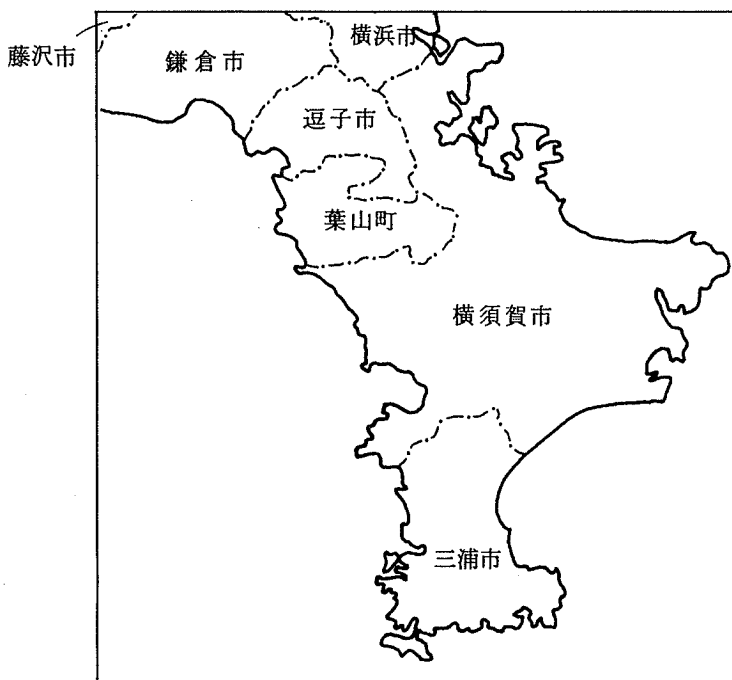


## Ⅱ 行政区画

本調査対象地域の行政区画は、6市1町で、横須賀市、逗子市、三浦市、葉山町の全域及び横浜市、鎌倉市、藤沢市の一部である（図2）。

なお、藤沢市については、本調査対象地域に含まれる面積が狭少であるので、以下の記述においては省略する。

図2 行政区画



### Ⅲ 人 口

本調査対象地域に含まれる市町（藤沢市を除き、横浜市は金沢区に限る）の人口は、昭和59年10月1日現在で約91万人であり、県の総人口の12.4%を占める。人口密度は4,045人/km<sup>2</sup>であり、県全体の人口密度3,052人/km<sup>2</sup>よりも高い。

昭和40年からの人口の推移をみると、約286千人、45.8%増加しており、高度経済成長期の昭和40年代の方が、昭和50年以降よりも人口増加率は高かった。これは、県全体の傾向と一致している。ただし、表1下段に示すとおり、本地域の増加率は、各年次間とも県全体の増加率を下まわっており、本調査対象地域の開発は県全体のレベルよりも抑えられていることがわかる。

人口増加の状況を市町別にみると、図幅内北部の横浜市金沢区の人口増加率は昭和40～59年で98.8%となり、この間に人口が2倍近くに増えている。これに対し、三浦半島最南部の三浦市では、昭和40～59年で18.2%と図幅内で最も人口増加率が低く、都心部からの距離に応じて人口増加が少なくなる様子が見られる。

表1 人口の推移

| 市町 \ 年                             | 昭和59年                | 昭和55年                | 昭和50年                | 昭和45年                | 昭和40年               |
|------------------------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|
| 横浜市金沢区                             | 171,477 <sup>人</sup> | 154,688 <sup>人</sup> | 135,350 <sup>人</sup> | 108,699 <sup>人</sup> | 86,251 <sup>人</sup> |
| 横須賀市                               | 427,351              | 421,112              | 389,559              | 347,568              | 317,411             |
| 鎌倉市                                | 175,510              | 172,612              | 165,548              | 139,253              | 118,329             |
| 逗子市                                | 57,874               | 58,481               | 56,298               | 48,242               | 43,211              |
| 三浦市                                | 50,367               | 48,685               | 47,890               | 45,543               | 42,601              |
| 葉山町                                | 29,243               | 28,360               | 24,003               | 19,605               | 17,617              |
| 上記地域計 <sup>Ⓐ</sup><br>(県総人口に占める割合) | 911,822<br>(12.4%)   | 883,938<br>(12.8%)   | 818,648<br>(12.8%)   | 708,910<br>(13.0%)   | 625,420<br>(14.1%)  |
| 県計 <sup>Ⓑ</sup>                    | 7,327,697            | 6,924,258            | 6,397,748            | 5,470,802            | 4,430,743           |

| 人口増加率 | 地域計 <sup>Ⓐ</sup> | 3.2% | 8.0% | 15.5% | 13.3% |
|-------|------------------|------|------|-------|-------|
|       | 県計 <sup>Ⓑ</sup>  | 5.8  | 8.2  | 16.9  | 23.5  |

昭和59年 : 県統計課「神奈川県人口統計調査結果」(10月1日現在)  
 昭和40～55年 : 国勢調査(各年10月1日現在)

## Ⅳ 産 業

本調査対象地域に含まれる市町の産業について、昭和56年度の産業別従業者数でみると、表2のとおり、卸売業・小売業の従業者が全従業者数の28.7%を占めて最も多く（県全体では26.0%）、次いでサービス業が23.5%（県全体では20.3%）、製造業が21.9%（県全体では29.5%）と続く。

製造業従業者の割合がトップを占める県全体の傾向とは若干異なり、本地域では三次産業のウェイトがより高いことがわかる。

農林水産業従業者の率0.9%は、県全体の平均0.3%を上まわるが、その中でも三浦市の水産業従業者数は、県内市町村の中でも群を抜いて高い。

製造業の事業所数（従業者4人以上の事業所）（表3）は県全体の7.6%を占めるが、製造品出荷額等では8.4%を占め、また、商業（卸・小売業、飲食店）（表4）の商店数は県全体の12.5%にあたり、年間商品販売額は9.5%である。

表2 産業別従業者数

| 市 町 区 分 | 計                   | 農林水産業           | 建設業                | 製造業                 | 卸・小売業               |
|---------|---------------------|-----------------|--------------------|---------------------|---------------------|
| 横浜市金沢区  | 43,002 <sup>人</sup> | 47 <sup>人</sup> | 2,180 <sup>人</sup> | 12,167 <sup>人</sup> | 11,867 <sup>人</sup> |
| 横須賀市    | 148,218             | 410             | 11,733             | 33,320              | 40,056              |
| 鎌倉市     | 57,288              | 53              | 3,165              | 12,776              | 17,756              |
| 逗子市     | 11,156              | 32              | 946                | 932                 | 3,969               |
| 三浦市     | 15,247              | 1,869           | 981                | 1,823               | 5,086               |
| 葉山町     | 5,228               | 12              | 765                | 246                 | 1,701               |
| 上記地域計   | 280,139             | 2,423<br>(0.9%) | 19,770<br>(7.1%)   | 61,264<br>(21.9%)   | 80,435<br>(28.7%)   |
| 県 計     | 2,641,886           | 7,170<br>(0.3%) | 225,930<br>(8.6%)  | 780,538<br>(29.5%)  | 687,483<br>(26.0%)  |

（ ）内は全就業者数に占める割合

昭和56年7月1日現在

事業所統計調査結果（総理府統計局の確定数値による）

表3 工業の概要

(従業者4人以上の事業所)  
(百万円)

| 市町    | 区分  | 事業所数            | 製造品出荷額等             |
|-------|-----|-----------------|---------------------|
| 横浜市   | 金沢区 | 423             | 278,312             |
| 横須賀市  |     | 570             | 1,148,628           |
| 鎌倉市   |     | 221             | 423,929             |
| 逗子市   |     | 49              | 4,010               |
| 三浦市   |     | 66              | 21,042              |
| 葉山町   |     | 14              | 719                 |
| 上記地域計 |     | 1,343<br>(7.6%) | 1,876,640<br>(8.4%) |
| 県計    |     | 17,603          | 22,392,945          |

( )内は県計に占める割合  
昭和58年12月31日現在  
工業統計調査結果

| 運輸・通信業            | サービス業              | その他               |
|-------------------|--------------------|-------------------|
| 4,287人            | 9,582人             | 2,872人            |
| 7,447             | 32,877             | 22,375            |
| 4,216             | 14,594             | 4,728             |
| 701               | 3,173              | 1,403             |
| 833               | 3,674              | 981               |
| 272               | 1,830              | 402               |
| 17,756<br>(6.3%)  | 65,730<br>(23.5%)  | 32,761<br>(11.7%) |
| 188,073<br>(7.1%) | 536,077<br>(20.3%) | 216,615<br>(8.2%) |

表4 商業の概要

(十万円)

| 市町    | 区分  | 商店数               | 年間商品販売額              |
|-------|-----|-------------------|----------------------|
| 横浜市   | 金沢区 | 2,196             | 3,969,749            |
| 横須賀市  |     | 8,256             | 5,305,643            |
| 鎌倉市   |     | 3,410             | 1,930,666            |
| 逗子市   |     | 858               | 524,206              |
| 三浦市   |     | 1,321             | 1,320,023            |
| 葉山町   |     | 350               | 180,678              |
| 上記地域計 |     | 16,391<br>(12.5%) | 13,230,965<br>(9.5%) |
| 県計    |     | 131,222           | 139,921,011          |

( )内は県計に占める割合  
昭和57年6月1日現在  
商業統計調査結果

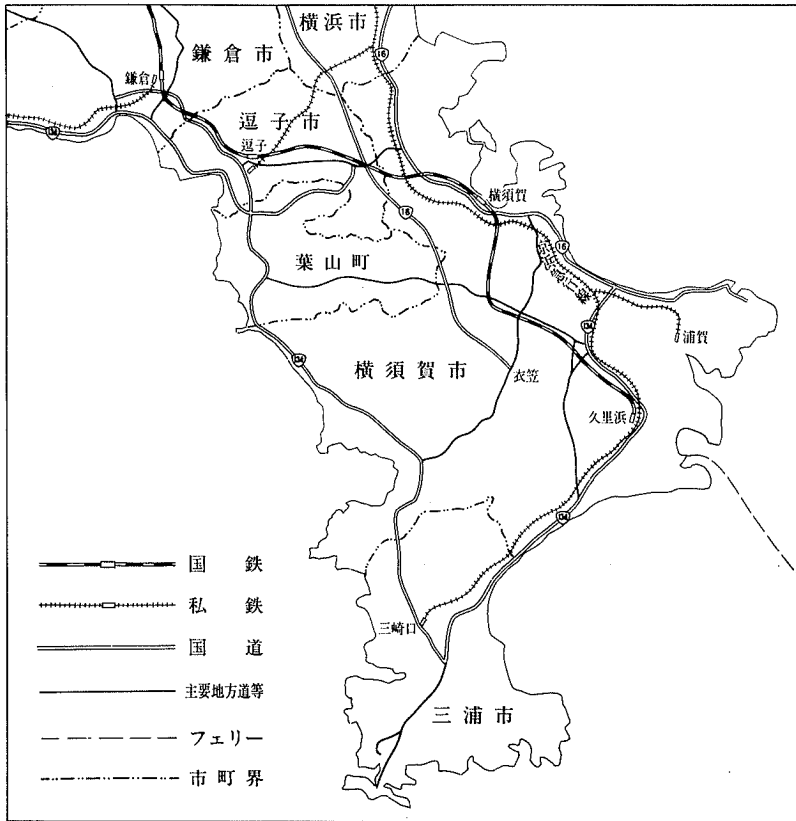
## V 交 通

本調査対象地域の主要交通を図3に示す。鉄道では、国鉄横須賀線（東京－横浜－大船－鎌倉－横須賀－久里浜）が三浦半島北部を相模湾側から東京湾側へ抜けて、横浜－久里浜間を約1時間、東京－久里浜間を約1時間半で結んでいる。また、東京湾側には京浜急行線（品川－横浜－横須賀中央－京浜久里浜－三崎口）がほぼ海岸沿いに三浦半島先端部まで伸びており、国鉄横須賀線とともに、横浜方面及び東京都心部と三浦半島を結ぶ主要な通勤の足となっている。

道路網は、東京湾岸沿いに横須賀まで走る国道16号線と、これに続いて三浦半島南部をまわって相模湾岸沿いを走る国道134号線で、三浦半島を一周できる形になっている。

東京湾側と相模湾側を東西に結ぶ道路として県道横須賀返子線、逗葉新道、県道横須賀葉山線、県道横須賀三崎線などがある。昭和59年には、国道16号線（横浜・横須賀道路）が三浦半島中央部を貫いて衣笠インターチェンジまで開通し、都心から三浦半島南部への時間的距離が短縮された。

図3 交通の概要



## VI ま と め

本調査対象地域は、東京や横浜・川崎に連続する位置にある中で、三方を海に囲まれた半島という特性や起伏に富んだ地形から、横浜などのような著しい市街化の進展には及んでおらず、豊かな自然や歴史、文化に富んだ地域である。複雑に入り組んだ海岸線を生かした海洋レジャーやハイキングに適した丘陵地など、日帰り観光の場として広く親しまれていると同時に、自然に恵まれた良好な住宅地も数多く形成されている。生産性の高い野菜づくりや県内随一の魚獲量のある水産業など、生鮮食料の生産基地としての役割も担っている。また、鎌倉の寺社をはじめとして歴史的文化遺産が豊富であることも特筆に値する。このように、この地域は、画一的な都市化の波に押し流されることなく、自然と人間の営みが調和のとれた形で共存している。

各都市は、このような自然条件と社会的条件を生かして、歴史と文化のまち鎌倉、環境の優れた住宅地・保養地の葉山、港を中心とした横須賀、農業・水産業の発達した三浦など、個性的な都市像を見せている。

今後とも、自然や歴史との調和を基調として、21世紀へ向けて、高齢化社会の到来や技術革新、情報化社会など様々な社会的な変化に対応できる活力ある地域づくりを進めていくことが肝要である。そのために、恵まれた自然環境や歴史的文化遺産を保全し、これを生かしながら、既存の農業・水産業を新技術の積極的導入などにより一層振興させていくこと、また、交通網の整備、先端技術を活用した産業の展開などにより地域の活性化を図っていくことが課題となっている。



# 各 論

# I 地形分類図

## 1 地形概説

三浦半島は神奈川県の南東部に位置し、南北方向に最大10Kmの幅をもち、相模湾と東京湾とを分かち半島である。海岸は小湾が多く、変化に富み、複雑な形の海岸線である。

三浦半島の主体をなす三浦丘陵は多摩丘陵より一段高い丘陵（標高100m～200m）である。三浦丘陵と多摩丘陵の境は、江ノ島の対岸の藤沢市片瀬から円海山（153m）の北麓を通過して東京湾岸の横浜市富岡に続く100mの等高線にとることができる。

南北方向に細長く伸びている半島であるが、南北に伸びる脊稜山脈に相当するものは無く、山並は数列に分れて北西—南東方向に配列している。それらの地形は、西北西—東南東の走向で半島を横切る数本の断層（三梨・矢崎、1969；太田他、1982など）の影響を強く受けている。

## 2 地形地域区分

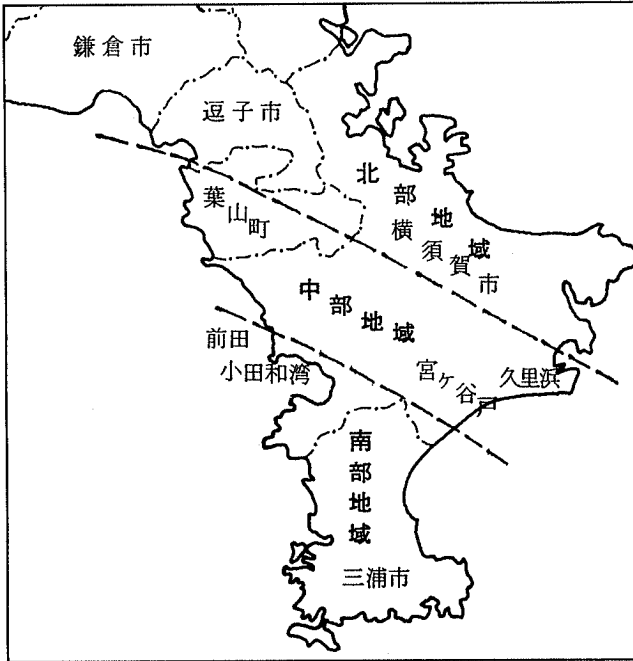
このような特徴を持つ三浦半島は、地形・地質学的にみると北部、中部、南部の3地域に区分される。

北部地域は多摩川右岸の川崎・横浜から連続する多摩丘陵の延長に当る丘陵性の地形よりなる。多摩丘陵と三浦丘陵の境は前述のように相模湾岸の片瀬から円海山の北麓を通り東京湾岸の富岡を結んだ線である。本報告では、南限を返子の田越たごえ川河口と横須賀の久里浜を結んだ線とした。田越川河口から横須賀市衣笠きぬがさにかけての境界線は、三浦半島の基盤をなす第三系の葉山層群と三浦層群との不整合面に一致し、葉山ながえの長柄から二子山（209.3m）、島山（208.0m）ではそれらの北麓を西北西—東南東に通る。

中部地域は地質学的に三浦半島の基盤をなす葉山層群の露出する葉山隆起帯である。その北限は前述のように田越川河口から衣笠を通り久里浜を結んだ線とする。南限は相模湾に面した小田和湾北岸の横須賀市前田から林たけを通り、武山やま（206m）の南斜面に沿って西北西—東南東方向に伸び、東京湾の横須賀市宮ヶ谷戸に至る武山断層（大塚、1935）とする。

南部地域は武山断層以南の台地が広く発達した地域である。本地域は、東京湾岸の三浦市菊名から相模湾岸の黒崎ノ鼻に至る南下浦断層（杉村，1964）を境にして、北側の宮田台地と南側の三崎海食台地に二分することが出来る。

図4 地形地域区分



### 3 地形細説

#### 3.1 山地・丘陵地

##### 3.1.1 北部地域

鎌倉の天台山(141.4<sup>m</sup>)や鷹取山(139.0<sup>m</sup>)などのように、所によっては120<sup>m</sup>を越える孤立丘があるが、多くは100<sup>m</sup>前後の高度を有し、山頂平坦面が広く追跡出来る。山頂平坦面の多くは大規模な人工改変を受けて住宅団地、霊園などに変貌している。山腹の傾斜は一部には30°を越える所も見られるが、全体的には30°~15°の所が多い。15°以下の緩斜面は少ない。30°以下の傾斜地では住宅地となっている所が多い。

##### 3.1.2 中部地域

本地域は三浦半島の最高部に当り、大楠山(242.5<sup>m</sup>)は中部地域での最高点である。つまり、三浦半島の最高地点である。全体的には急峻な山地性の地形を呈している。

北から二子山、大楠山、武山をそれぞれ中心とした三つの山脈が北西-南東方向に伸びる。二子山、大楠山両山脈の間には衣笠断層(KANEKO, 1969)、大楠山、武山両山脈の間には北武断層(KANEKO, 1969)、武山山脈の南麓には武山断層がいずれも西北西-東南東方向に走っている。

山頂緩斜面の占める面積は比較的狭く、30°を越える急斜面が広く発達している。30°~15°の斜面もかなり広く認められるが、15°以下の緩斜面の分布は少ない。衣笠、北武両断層は地形にも複雑な影響を与え、これらの断層線に沿った横須賀市阿部倉町および小矢部町周辺、長沢および野比周辺には地すべり地形がよく発達している。また、衣笠断層に沿った地域には地すべりによって生じた地形が観察される。

##### 3.1.3 南部地域

山地は南側の岩殿山(82.4<sup>m</sup>)だけである。岩殿山も人工的に改変されて耕作地となっている部分が多い。

#### 3.2 台地

##### 3.2.1 北部地域

三浦半島の東端に近い横須賀市走水付近には標高100<sup>m</sup>前後の平坦面が見ら

れる。この平坦面は海成段丘からなり小原<sup>まぼらだい</sup>台面（武蔵野Ⅰ面：M1面，約7万年前）の模式地となっている（走水団研グループ，1965；町田他，1974）。

### 3.2.2 中部地域

本地域は全体として急峻な山地性の地形を呈しており、台地状の地形は殆ど認められない。

### 3.2.3 南部地域

本地域は広い洪積台地の分布で特徴づけられる（岡他，1974；小玉他，1980）。台地は台地面を被う関東ローム層の層準によって、高位より引橋<sup>しもすえよし</sup>面（下末吉面：S面，約10万年前）、小原台面（武蔵野Ⅰ面：M1面，約7万年前）、三崎面（武蔵野Ⅲ面：M3面，約5万年前）に区分される（町田他，1974；岡他，1974）。これらのうち、引橋<sup>ひきはし</sup>面及び小原台面は三崎市引橋を中心とする地域に分布する。三崎面は三崎海食台地であり、その分布が広い。宮田台地では台地面の高度分布からみて西に傾く傾動運動が認められる（奥村他，1977）。引橋付近の地表面は引橋断層（KANEKO, 1969）の影響を受けて、標高も他の台地面に比べて高い。台地と後述の沖積面との間には明瞭な段丘崖が発達し、その傾斜は30°を超える所が多い。城ヶ島の山頂に見られる平坦面は三崎面に対比される。

表5 三浦半島の段丘面区分

|                    |    | 北 部  | 中 部 | 南 部  | 形成年代    |
|--------------------|----|------|-----|------|---------|
| N 面<br>(完新世段丘面) HT |    |      | 野比面 | 野比面  | 約6000年前 |
| M 面<br>(武蔵野段丘面群)   | M3 |      | 三崎面 | 三崎面  | 約5万年前   |
|                    | M1 | 小原台面 |     | 小原台面 | 約7万年前   |
| S 面<br>(下末吉段丘面)    |    |      |     | 引橋面  | 約10万年前  |

注) M2面は本図幅には分布しない。

### 3.3 低地

#### 3.3.1 北部地域

鎌倉と逗子には滑川と田越川とその支流に沿ってやや広い沖積平野がみられる(松島, 1974)。この平野の一部には砂堆の発達が認められる。各河川に沿う沖積平野や谷底平野の多くの部分は盛土され住宅地となっている。

東京湾岸では横浜市金沢の平瀧湾や、夏島を中心とした横須賀市追浜周辺に第二次大戦後大規模な埋立地が形成されて、現在は日産自動車追浜工場が立地している。横須賀の長浦湾、横須賀港周辺は広い範囲にわたって明治時代より埋立が行われており、現在では自衛隊施設となっている。馬堀海岸も最近の埋立によって住宅地になった。

衣笠から久里浜にかけての平作川流域は、三浦半島で最も広い沖積平野となっている(蟹江・石川, 1976)。海岸線沿いには二列の砂堆があり、集落が形成されていた。背後の低地は最近、殆どの部分が盛土されて工場や住宅地となっている。久里浜港入口周辺も広い範囲にわたって埋立てられ、火力発電所、刑務所などがある。

#### 3.3.2 中部地域

葉山町の森戸川、下山川などの小河川沿いに沖積平野が発達するが、規模は小さい(神奈川県土木部砂防課, 1967; 松島, 1975, 1982; 熊木, 1982)。山地に食い込む谷には谷底平野は殆ど見られない。

#### 3.3.3 南部地域

本地域の谷底平野は台地を刻む小河川沿いに細長く発達する。その横断面は凹字型を示す場合が多い。

東京湾側の野比から菊名にかけての三浦海岸は砂浜海岸となっており、背後に完新世段丘が認められる(松島, 1976; 熊木, 1982)。相模湾側の小田和湾は広く埋立が進み、現在は自衛隊の武山駐屯地などになっている。

引橋を通る東西線以南の相模湾側には、油壺、諸磯などの沈水海岸(リアス式海岸)が発達し、台地に奥深く海が侵入している。南部および東京湾側には岩石海岸の発達をみる。

## 参 考 文 献

- 走水団研グループ, 1965.三浦半島小原台付近の第四系. 地球科学, № 80, 1-11.
- 神奈川県土木部砂防課, 1967.砂防調査報告書(田越川, 森戸川, 下山川, 子安川, 前田川, 狭塚川). 神奈川県, 1-29.
- KANEKO, S., 1969. Right lateral Faulting in Miura Peninsula, south of Tokyo, Japan. *Jour. Geol. Soc. Japan.* 75, 199-208.
- 蟹江康光・石川重幸, 1976.三浦半島, 平作川の沖積層. 横須賀市博研報(自然科学), № 23, 45-59.
- 小玉喜三郎・岡重文・三梨昂, 1980.三崎地域の地質. 地域地質研究報告, 1-38, 地質調査所.
- 国土地理院, 1976.2万5千分の1土地条件図 横須賀.  
———, 1978.土地条件調査報告書(富津, 横須賀). 1-63.
- 熊木洋太, 1982.三浦半島の完新世段丘と完新世地殻変動. 国土地理院時報, 54, 41-49.
- 町田洋・新井房夫・村田明美・袴田和夫, 1974.南関東における第四紀中期のテフラの対比とそれに基づく編年. 地学雑, 83, 22-58.
- 松島義章, 1974.神奈川の地質 I. 神奈川県博研報(自然科学), № 5, 3-40.  
———, 1975.三浦半島葉山町の沖積層について, 神奈川県博研報(自然科学) № 8, 57-77.  
———, 1976.三浦半島南部の沖積層, 神奈川県博研究(自然科学), № 9, 87-162.  
———, 1982.三浦半島の葉山森戸川沖積層から産出した木片の<sup>14</sup>C年代. 神奈川県博研報(自然科学), № 13, 67-74.
- 三梨 昂・矢崎 清, 1968.日本油田・ガス田図, 6, 三浦半島.
- 岡 重文・宇野沢昭・安藤高明, 1974.三浦半島南部の段丘変形. 地質月報, 25, 1-17.

奥村 清・吉田晴彦・加藤邦宣，1974.三浦半島宮田台地の第四系．地学雑，  
86, 33-46.

太田陽子・松田時彦・池田安隆，D.E.WILLIAMS ・渡辺憲司・小池敏夫・  
見上敬三，1982.三浦半島の活断層.神奈川県地震災害対策資料，1-80.

大塚弥之助，1935.故山崎博士の三浦半島武山断層の地質学的考察．地理評，  
11, 455-462.

杉村新，1964.三浦半島の南下浦断層と武山断層．地質雑，70, 397.

奥 村 清  
森 慎 一  
松 島 義 章  
長谷川 善 和  
杉 山 茂 夫



## Ⅱ 表層地質図

### 1 表層地質概説

三浦半島の地質は、中央部の葉山隆起帯とその北部ならびに南部の3つの地域に分けられる。

北部地域は、主として新第三系中新統上部～鮮新統下部の三浦層群により構成されている。南限は逗子の田越川河口と横須賀の久里浜を結んだ線である。田越川河口から横須賀市衣笠の範囲内では、この境界線は新第三系中新統の葉山層群と三浦層群の不整合面に一致する。

中部地域は、西北西—東南東方向に分布する一つの沈降帯とこれを挟む南北二つの隆起帯からなる。沈降帯は三浦層群によって、隆起帯は半島の基盤をなす葉山層群によって構成される。沈降帯の北側は衣笠断層、南側は北武断層によって区切られ、それぞれ隆起帯の葉山層群に接している。中部地域の南限は相模湾側の横須賀市前田から林をとおり、武山の南斜面に沿って西北西—東南東に伸び、東京湾側の横須賀市宮ヶ谷戸に至る武山断層である。

南部地域は、三崎台地（宮田台地）に相当し、三浦層群下部の三崎町層（中新統上部）が広く分布し、その上には上総層群上部の林層（第四系更新統下部）と相模層群の宮田層（更新統中部）あるいは横須賀層（更新統上部）ならびに比較的厚い関東ローム層が分布する。

表 6 三浦半島中・北部における層序区分と岩相

|        |                        |                    |         |        |        |
|--------|------------------------|--------------------|---------|--------|--------|
| 未固結堆積物 | 表土・碎屑物・ローム             | 埋め土、盛り土            | } 完新世   | } 第四紀  |        |
|        | 表土・砂・泥・礫               | 崖錐堆積物              |         |        |        |
|        | 表土・ローム                 | 沖積層                |         |        |        |
| 半固結物   | 泥・砂・礫                  | 新期ローム層(武蔵野・立川ローム層) | } 更新世   | } 新第三紀 |        |
|        | 凝灰質泥岩・軽石・スコリア層         | 片瀬層                |         |        | } 相模層群 |
|        | 凝灰質砂礫岩                 | 野島層                |         |        |        |
| 固結堆積物  | 凝灰質泥岩・軽石・スコリア層         | 浦郷層                | } 鮮新世   | } 新第三紀 |        |
|        | 泥岩・凝灰質泥岩・軽石・スコリア層・未固結砂 | 池子層                |         |        |        |
|        | 角礫岩・凝灰質岩／石灰岩・砂岩        | 逗子層                | } 三浦層群  |        |        |
|        | 凝灰質砂岩・泥岩               | 田越川層/下山口層          |         |        |        |
|        | 泥岩・凝灰岩                 | 矢部層                | } 中 新 世 |        |        |
|        | 砂岩・礫岩・泥岩               | 衣笠層                |         |        |        |
|        | 凝灰質砂岩・泥岩               | 大山層                | } 葉山層群  |        |        |
|        | 硬質泥岩・凝灰岩               | 鏡鋸層                |         |        |        |
|        | 森戸層                    |                    |         |        |        |

表 7 三浦半島南部における層序区分と岩相

|        |                     |                    |       |        |        |
|--------|---------------------|--------------------|-------|--------|--------|
| 未固結堆積物 | 表土・砂・泥・礫            | 埋め土、盛り土            | } 完新世 | } 第四紀  |        |
|        | 表土・ローム              | 沖積層                |       |        |        |
|        | 砂・礫                 | 新期ローム層(武蔵野・立川ローム層) |       |        |        |
|        | 砂・礫                 | 三崎層                |       |        |        |
| 半固結堆積物 | ローム                 | 小原台層               | } 更新世 | } 新第三紀 |        |
|        | 砂・礫                 | 旧期ローム層(下末吉ローム層)    |       |        |        |
|        | 泥                   | 走水砂礫部層             |       |        | } 横須賀層 |
|        | 凝灰質砂・泥質砂・礫          | 大津泥部層              |       |        |        |
| 凝灰質砂・礫 | 宮田層                 | } 上総層群             |       |        |        |
| 固結堆積物  | 凝灰角礫岩・凝灰質泥岩・スコリア・軽石 |                    | 林層    | } 三浦層群 |        |
|        | スコリア・軽石・凝灰質泥岩       | 初声層                |       |        |        |
|        | 凝灰質泥岩・スコリア・軽石       | 油壺層                |       |        |        |
|        |                     | 三崎町層               |       |        |        |

## 2 表層地質細説

### 2.1 固結堆積物

#### 2.1.1 葉山層群

三浦半島の基盤をなす葉山層群は、中央部の2つの隆起帯(葉山-衣笠、<sup>あき</sup>秋谷-武山地域)に広く分布する。本層群は西北西-東南東ないし北西-南東の走向を示し、北東へ $50^{\circ}\sim 90^{\circ}$ で傾斜する。いくつかの小規模な背斜および向斜構造が認められ、逆転構造もしばしばみられる。本層群の時代は、有孔虫群集によって中新世前期とされている。

本層群は下位から森戸層、<sup>あぶすり</sup>鑑摺層、大山層、衣笠層、矢部層に区別されている。

森戸層は白色凝灰岩と灰色～黒色泥岩からなる。場所により砂岩脈を挟むことがある。凝灰岩には細いラミナが発達していることが多い。一般に岩石は堅硬で、風化に対して強い。森戸海岸付近にみられる大小の岩や島は、ほとんど森戸層で構成されている。露頭で大きく塊状に崩れていることは稀で、徐々に表面から壊れていく性質がある。断層運動によってもまれると軟弱化しやすい岩石となる。全体の層厚は700m以上である。

鑑摺層は凝灰質の泥岩と細～粗粒砂岩の互層からなる。各単層の厚さは5～30cmぐらいのものが多く、粗粒砂岩は1～3mに及ぶことがある。ラミナが発達が顕著であり、部分的に数mmの薄い炭層を挟む。風化を受けやすく、風化すると層理面に沿ってはがれ、崩れやすくなる。本層の層厚は400～500mである。

大山層は塊状無層理の砂岩を主体とする。部分的に泥岩、礫岩を挟む。礫岩の基質は全般的に凝灰質である。風化に対しては強く、無層理塊状であるため崩れにくい。全体の層厚は約1,000mである。

衣笠層は凝灰岩ならびに泥岩からなる。無数の細かい節理が発達しており、擾乱が激しい。岩石そのものは堅硬で風化に対して強い。層厚は1,800mである。

矢部層は、下部では凝灰質粗粒砂岩からなり、一部青灰色の凝灰岩を挟む。上部は砂質泥岩と凝灰質砂岩の互層からなる。最上部は砂質泥岩になる。全般的に堅硬で、互層の場合でも層理面はゆ着しており、はがれにくい。全体の層厚は400～500mである。



三浦半島の基盤岩である葉山層群の鏡摺層（固結堆積物）。垂直に立っている砂岩、泥岩互層の磯が変化にとむ海岸をつくっている。葉山海岸（昭和59年）

### 2.1.2 三浦層群

本層群は半島の北部、中央部、南部の3地域にわたって分布するが、それぞれの地域によって岩相、構造を異にする。特に北部、中央部の三浦層群と南部のそれとの間における岩相の違いは著しく、後者は多量のスコリア質火砕岩を伴う。

北部、中央部に分布する三浦層群は、鏡摺の不整合でみられるように、葉山層群を著しい傾斜不整合で覆う。一般的に西北西—東南東の走向で、北東に傾く単斜構造である。その傾斜は南の方は $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ で、北にいくほど緩くなり、鎌倉地域では $10^{\circ}$ 内外となる。中央部に分布する三浦層群は、ほぼ北西—南東の走向であるが、場所によってそれから大きくはずれる。傾斜は $30^{\circ}\sim 50^{\circ}$ 、あるいはそれ以上である。

北部における三浦層群の最下部の累層は田越川層、中央部におけるそれは下山口層である。田越川層は緑色凝灰岩や泥岩、蛇紋岩の礫を含む暗緑色の礫層

であり、貝化石や単体サンゴ化石を産出する。無層理塊状で、風化に対して強い。層厚は30m以下である。下山口層は厚い白色の石灰岩と緑色の粗粒砂岩からなる。石灰岩は30~50cmの層状をなし、クロスラミナが発達する。フジツボ、魚の骨、二枚貝などの化石のほか凝灰岩の角礫を多く含む。粗粒砂岩にも貝殻が含まれる。石灰岩は風化に対して強い。成層をなし、その層理面に沿って風化が進み、ブロック状に崩れる。粗粒砂岩は無層理塊状であるが、節理が発達しやすく、風化に対し弱い。石灰岩と粗粒砂岩と合わせて、層厚は約100mである。田越川層と下山口層の上位には逗子層が重なる。

逗子層の基底部20~40mの部分は凝灰岩を主とする。それより上部ではシルト岩または浮石質岩からなり、数10cmから1mごとに、厚さ数cmから数10cmの浮石質凝灰岩や未固結の細~中粒砂層を挟んで互層をなす。最上部層準には厚さ60mにわたり、堆積時に生じた海底地すべりによる、大規模なスランプ構造が認められる。基底部の凝灰岩は層理面が固結して、風化に強い。上部の泥岩は風化しやすく、しばしば玉ねぎ状構造が発達する。層理に沿って風化しやすく、はがれる傾向がみられる。本層の層厚は約800mである。

北部では、逗子層の上位に、池子層が分布する。池子層は凝灰質泥岩とスコリア質火砕岩の互層からなる。かつて石材として鷹取山で採掘していた岩石で、堅硬であり、風化に対して強い。

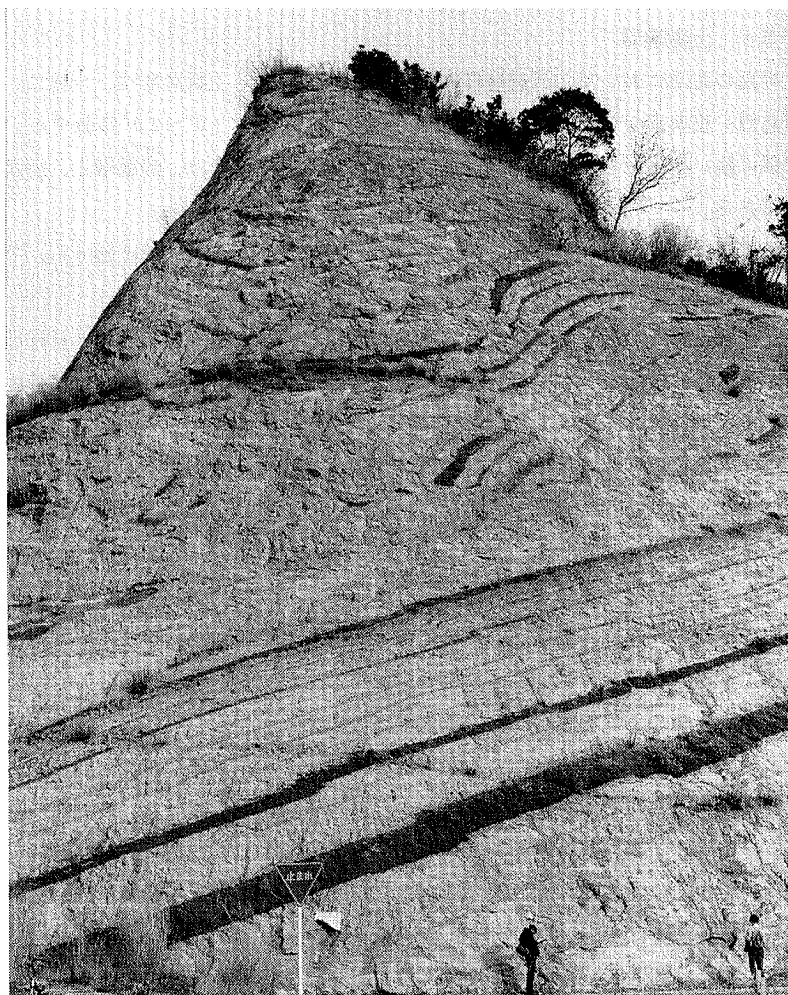
南部に分布する三浦層群は、一般に東西走向で、北傾斜である。下部の地層の傾斜は40°~60°、上部の地層では10°~20°である。荒崎地域では一般走向と大きく異なり、北東-南西の走向で、南東傾斜を示し、数本の小規模な褶曲が発達する。城ヶ島、三崎間では逆転を伴う背斜構造が認められる。南部における三浦層群は、下位から三崎町層、油壺層、初声層と区分される。

三崎町層は半島南端に分布し、スコリア質火砕質砂岩(厚さ2~20cm)と火砕質泥岩(厚さ10~50cm)の互層からなる。全体の層厚は約700mである。

油壺層はスコリア質火砕層と凝灰質泥岩の薄層との互層からなる。層厚は約160mである。

初声層は凝灰角礫岩を主とし、凝灰岩、スコリア、軽石などの薄層を挟む。層厚は460mである。

上述の3累層はともに風化に対して強く、層理面もゆ着してはがれにくい。



逗子層上部の砂岩（黒色部，未固結堆積物）、泥岩（白色部，固結堆積物）互層。堆積後の海底地すべりにより逗子層が変形褶曲したスランプ構造。逗子市池子アザリエ団地南縁（昭和59年）

## 2.2 半固結堆積物

### 2.2.1 上総層群

半島の北部において、三浦層群の上に不整合で重なる上総層群は、一般に、西北西—東南東ないし北西—南東方向の走向で、北東へ $10^{\circ}\sim 20^{\circ}$ 傾斜する。一部に緩い褶曲を形成する。調査地域に分布する上総層群は、浦郷層と、野島層である。

浦郷層は貝殻片を多量に含む凝灰質砂で、固結度が低い。層厚は約 $65m$ である。

野島層はおもに泥岩からなり、スコリアや軽石の薄層を挟む。一部に貝化石を多量に含む礫層が分布する。泥岩は塊状無層理であり、地層の傾斜も緩やかであるため、大きく崩壊しない。

三浦半島南部の北縁部には、上総層群に属する林層が分布する。本層はスコリアや軽石を含む凝灰質砂で、古生層由来の円礫を含む。固結度が低い。層厚は約 $25m$ である。

### 2.2.2 相模層群

南部地域の西縁に、相模層群に属する片瀬層（長沼層）が分布する。本層は泥層、砂礫層からなり、一部に貝化石が密集して産する。層厚は約 $30m$ で、浦郷層や池子層の上に不整合に、ほぼ水平に分布する。

宮田層は、宮田台地に分布する。下部では $5^{\circ}\sim 10^{\circ}$ 南あるいは西へ傾くが、上部はほとんど水平である。本層は5つの部層に分けられている。最下位の須<sup>す</sup>軽<sup>る</sup>谷<sup>や</sup>砂部層は一部に礫層を含む無層理の中～粗粒砂からなる。層厚は約 $90m$ である。その上位の津久井浜砂礫部層は化石を多く含む細礫ならびに粗～中粒砂からなる。層厚は $15m$ 以上である。高円坊<sup>こうえんぼう</sup>砂部層は無層理の中～細粒砂を主とする。層厚は約 $50m$ である。鹿穴<sup>しかあな</sup>凝灰質砂部層は無層理の凝灰質砂からなる。層厚は $20\sim 25m$ である。最上位の一町田<sup>いちちょうだ</sup>砂部層は泥質の砂からなる。層厚は約 $8m$ である。宮田層のほとんどを占める砂は未固結である。

横須賀層<sup>おぼらだい</sup>は小原台に分布する。ほぼ水平に、三浦層群を不整合に覆う。層相によって二部層に分けられる。下位の天津泥部層は主として未固結の中粒<sup>はしり</sup>砂からなる。基底部に貝殻を多く含むことがある。層厚は $30\sim 50m$ である。上位の走<sup>みず</sup>水砂礫部層は斜層理の発達する未固結の砂礫層からなる。層厚は約 $30m$ である。

## 2.3 未固結堆積物

### 2.3.1 段丘礫層

小原台層は宮田台地では、宮田層を、小原台では横須賀層をほぼ水平に不整合に覆う。主として未固結の粗粒砂層からなる。層厚は宮田台地で約25m、小原台地で2mである。上部は新期ロームに漸移する。

三崎層は宮田台地に分布する。三浦層群を不整合に覆う。主として、スコリア、軽石、小円礫を混在した淘汰のよい中粒砂からなる。上部はロームの混ざった泥である。層厚は0.5~1.5mである。上部は新期ローム（武蔵野ローム）に漸移する。

### 2.3.2 関東ローム層

半島におけるローム層の分布は、特に南部において顕著である。引橋台地では三崎町層を不整合に覆う砂礫層の上に、黄色軽石層を数枚挟む層厚6mの旧期ローム層（下末吉ローム層）が分布する。小原台地では、小原台砂礫層の上位に厚さ約8mの新期ローム層（立川・武蔵野ローム層）が分布する。この新期ローム層の基底部には厚さ30cm程の小原台軽石（OP）を伴うことを特徴とする。宮田台地から三崎にかけて発達する、小原台砂礫層の堆積面（小原台面）には、OPを伴う最大層厚10mの新期ローム層が分布する。また、三崎町の三崎層の堆積面（三崎面）には、基底部に東京軽石（TP）を伴う新期ローム層が7~8mの厚さで分布する。

半島の中央部の丘陵、山地にも新期ローム層が分布する。しかし、その分布は、平坦な山頂部、山脚部の平坦面などに局所的に限られ、その厚さは2~3mである。山腹や山脚部には、関東ロームと基盤岩から由来する岩塊とが混在する崖錐が、小規模ながら形成されているところがある。

北部地域では、三浦層群や上総層群を覆って、新期ローム層が比較的広く分布する。鎌倉・腰越地域では厚さ約6m、横須賀市坂本町付近で5~6mで、北にいくほど厚くなる傾向がある。ローム層が急崖に露出しているときは、風化に伴って節理が生じ、崩れ落ちることがある。

### 2.3.3 沖積層

沖積層は、丘陵や台地間の河川の流域、あるいは海岸に沿う低地などに分布する。沖積層は主として軟弱な砂ないし泥からなる。全体として北部地域



に厚く発達しており、南部地域では薄いという傾向がある。

河川の流域に分布する沖積層は、かつての流路を埋めて堆積したものであり、川口近くでは細砂ないし泥質の砂層からなるが、川の上流地域では泥がちになる。おもな分布域として、柏尾川、滑川、田越川、平作川沿いの地域、宮田台地の周辺があげられる。そのほか、下山川や森戸川の流域および横須賀、浦賀、追浜、その他の沿岸地域にも小規模に分布する。

沖積層の厚さは場所によって異なる。柏尾川流域では、湾口の藤沢付近で30m以上である。埋没谷（古柏尾川）の谷底は現在の柏尾川に沿って続き、現在の河床より急な勾配をもつ。滑川埋没谷は現在の滑川より西側にずれており、勾配ははるかに急である。河口付近での沖積層の厚さは20m以上である。宮田台地周辺の小田和湾、宮田湾、三戸浜などの溺れ谷には、泥層を主とする沖積層が分布し、最も厚いところでは約30mである。

沖積層の分布するところでは地下水位が高く、地盤軟弱である。地下水を多量に汲みあげると、地盤沈下を起こすことがある。また、地震に対して弱く、液状化にもとづく流砂現象なども生じ、建造物の被害を大きくする。

#### 2.3.4 崖錐堆積物

崖錐堆積物は、山麓の崖が崩れて堆積したり、谷川の土砂が水に押し出されたり、地すべりで動いたりして形成されたもので、基盤の風化物である土砂や岩塊ならびに関東ロームなどが混じり合った、未固結の堆積物であり、緩やかな斜面を形成している。崩壊堆積物の下の基盤の表面近くの部分が地下水により粘土化され、潜在的な地すべり面を形成していることがしばしばある。このような場所を無造作に切土・盛土をすると地すべりが発生する。

#### 2.3.5 盛土

最近では、丘陵や山地の谷をごみや土砂で埋めたとて、利用することが多くなっている。盛土は軟弱であり、地形的凹地に分布するので流水が入りこみやすい。したがって、有効な排水対策、崩壊防止策が行なわれなければ、地すべりが生ずる。また、そのような対策が構じられていても、長い年月ののちには思いもよらぬ現象が生ずるかもしれないので、注意深く見守っていく必要がある。

## 2.4 火山性岩石

葉山層群分布域には、大小いくつかの蛇紋岩体のほか、玄武岩質の枕状溶岩や安山岩が分布する。この蛇紋岩と玄武岩は葉山層群堆積時に、地下深所から貫入したものが崩壊し、再堆積したものが多い。

## 2.5 温泉及び鉱泉

三浦半島には、温泉法による温泉を湧出する源泉が7ヶ所(横須賀市4源泉内利用源泉2、鎌倉市3源泉内利用源泉1)ある。泉温は14.5~18.8℃で、湧出量は1源泉当り2~41  $l/min$ である。

### 横須賀温泉

横須賀温泉は大楠山の山裾の秋谷、阿部倉を中心に昭和27年頃から開発された。現在は、三浦半島東部の吉井、大矢部にも温泉が開発されている。温泉はアルカリ性(pH 9.2)で丹沢山地の七沢温泉とよく似ている。

### 鎌倉温泉

鎌倉では俗に鎌倉十井(六角井、棟立井、かめ井、甘露井、鉄井、泉井、石井、扇井、底脱井、星月夜井)と呼ばれる地下水の利用があった。これらの井戸以外の井戸水は茶褐色を呈する場合が多かったので、上記十井は貴重な存在であった。昭和5~8年頃、十二所や浄明寺で最初の温泉が開発されたが、現在は、温泉台帳にもなく不明となっている。

鎌倉温泉は、二階堂、扇ヶ谷にあり、特に扇ヶ谷では病院の医療用に使われている。温泉は綱島温泉に似て茶褐色を呈し、溶存成分(2680 ppm)が多いのが特徴である(大木他, 1983)。

## 参 考 文 献

- 赤嶺秀雄・岩井四郎・小池 清・成瀬 洋・大森昌衛・関 陽太郎・鈴木好一・渡辺景隆, 1956. 三浦半島の三浦層群について. 地球科学, №30, 1-8.  
江藤哲人, 1985 MS. 三浦半島中・北部地域の地質(2万5千分の1地質図).  
大木靖衛, 荻野喜作, 平野富雄, 小鷹滋郎, 粟屋 徹, 杉山茂夫, 大山正雄, 1983. 神奈川県温泉誌, 温地研報告14, №4

垣見俊弘・平山次郎・影山邦夫, 1966. 小断層から求めた三浦半島北部の構造的応力場. 地質雑, 72, 469-489.

KANEKO, S., 1969. Right-lateral faulting in Miura Peninsula, South of Tokyo, Japan. *Jour. Geol. Soc. Japan*, 77, №6, 345-358.

小玉喜三郎・岡 重文・三梨 昂, 1980. 三崎地域の地質. 地域地質研究報告, 5万分の1図幅, 地質調査所, 38.

松島義章, 1974. 神奈川県の地質・1. 神奈川博研報, №5, 40.

———, 1976. 三浦半島南部の沖積層. 同上, №9, 87-162.

———, 1982. 三浦半島の葉山森戸川沖積層から産出した木片の<sup>14</sup>C年代. 神奈川博研報(自然科学), №13, 67-74.

見上敬三, 1978. 神奈川県の地質. 神奈川県史各論編 4 自然, 71-378.

———, 1980. 神奈川県地質図(5万分の1地質図). 神奈川県教育委員会.

———・江藤哲人, 1980, 1981. 逗子市域の地質. 逗子市文化財調査報告書, №9, 逗子市教育委員会, 29. (付1万分の1地質図).

———・———, 1985. 鎌倉市の地質: 鎌倉市文化財調査報告書(印刷中).

三梨 昂・矢崎清貫, 1968. 三浦半島, 日本油田, ガス田図 6(2万5千分の1地質図).

太田陽子・松田時彦・池田安隆・Williams, D.N., 渡辺憲司・小池敏夫・見上敬三, 1982. 三浦半島および国府津・松田地域の活断層に関する調査報告書. 神奈川県地震災害対策資料, 神奈川県, 1-80.

渡部景隆・小池敏夫・栗原謙二, 1968. 神奈川県葉山地域の地質(1万分の1地質図説明書).

|      |         |
|------|---------|
| 見上敬三 | 小池敏夫    |
| 江藤哲人 | 松島義章    |
| 森 慎一 | 尾崎公彦    |
| 今永 勇 | 相原延光    |
| 平田大二 | 大木靖衛    |
| 加藤磐雄 | 小 鷹 滋 郎 |
| 杉山茂夫 |         |

### Ⅲ 土 壤 図

#### 1 土 壤 概 説

三浦半島地域の林野土壌は黒ボク土（1統群：図示単位）と褐色森林土（2統群）の2土壌群（3土壌統群）が該当する。農耕地土壌は、未熟土（1統群）、黒ボク土（5統群）、褐色森林土（1統群）、褐色低地土（1統群）、灰色低地土（4統群）、グライ土（5統群）、黒泥土の7土壌群（18統群）と人工改変土（2種）が存在する。土壌の分布概要を地形区分の北部、中部、南部の3区分に準じて示せばつぎのとおりである。

北部地域：本地域は鎌倉市、逗子市、横須賀市のそれぞれの一部分が包含され、主として小丘陵地から成っている。土地利用は林地が主体で、黒ボク土（B<sub>ℓ</sub>D型）、乾性褐色森林土（B<sub>B</sub>型、B<sub>C</sub>型）、褐色森林土（B<sub>D</sub>型、B<sub>D</sub>(d)型）の分布が多い。農耕地土壌としては、淡色多湿黒ボク土、細粒褐色森林土、細粒強グライ土が認められる。また、近年、林地または農耕地の人工改変が増加する傾向にあり、人工改変台地土および人工改変低地土の分布が認められ、住宅、公共用地、工場等への利用が盛んである。

中部地域：本地域には逗子市の一部、葉山町、横須賀市の大部分が含まれる。本地域の大部分は丘陵地であり、土地利用は林地が主体で、黒ボク土（B<sub>ℓ</sub>D型）、乾性褐色森林土（B<sub>B</sub>型、B<sub>C</sub>型）、褐色森林土（B<sub>D</sub>型、B<sub>D</sub>(d)型）が分布している。農耕地土壌としては、海岸線に砂丘未熟土があり、このほか厚層多腐植質黒ボク土、細粒褐色森林土等の土壌が分布している。丘陵地の凹部には細粒灰色低地土・灰色系、中粗粒灰色低地土・灰色系、礫質灰色低地土・灰色系、細粒強グライ土、中粗粒強グライ土、細粒グライ土等の水田土壌が分布している。人工改変土の台地土と低地土は北部地域と同様に広く分布している。

南部地域：この地域は横須賀市南部と三浦市が包含され、主にほぼ平坦な台地上に各種タイプの黒ボク土が分布し野菜の生産適地となっている。台地を解析した凹部には中粗粒褐色低地土、細粒灰色低地土・灰色系、灰色低地土・下層有機質、強グライ土（2種）、グライ土（1種）、黒泥土等の水田土壌が分布している。

## 2 土壌細説

### 2.1 主として山地・丘陵地地域の土壌（林野土壌）

#### 2.1.1 黒ボク土

##### 2.1.1.1 黒ボク土（B<sub>D</sub>型）

この土壌は、三浦半島の北部から中部にかけて尾根または平坦な山頂部分に少範囲で分布している。腐植含量は表層 50 cm までが「富む」（5～10%）の状態、下層は 5% 以下である。表土の土性は壤質で、下層は粘質である。土壌の母材は火山灰であり、土地利用はスギ植林が主体で、一部にオオシマザクラが植栽されている。植生はスダジイ、ヤマグワ、ミズキ、アオキ等である。

#### 2.1.2 褐色森林土

##### 2.1.2.1 乾性褐色森林土（B<sub>B</sub>型、B<sub>C</sub>型）

この土壌は、三浦半島の山地または丘陵地の山頂や尾根に分布している。腐植含量は表層 20 cm までが「含む」（2～5%）の状態、下層は乏しい。表土



新炭林として植林された大島桜、土壌は黒ボク土（B<sub>D</sub>）

横須賀市阿部倉（昭和59年）

の土性は壤質で、下層は粘質である。また40~60 cm以下に風化礫を伴っている。土壌の母材は凝灰質砂岩または泥岩で養分に乏しいためスギ、ヒノキ等の造林は期待できず、薪炭林、シロダモ、カラスザンショウ、エノキなどの植生がみとめられる。

#### 2.1.2.2 褐色森林土(B<sub>D</sub>型、B<sub>D</sub>(d)型)

この土壌は、三浦半島の山地または丘陵地の山腹斜面上部から下部にかけて広範囲に分布している。腐植含量は、表層約50 cmが「富む」(5~10%)の状態である。土性は表層が壤質であり、50 cm以下は暗褐色の礫土となっている。土壌の母材は泥岩で、養分や水分の状態が比較的良好のため広汎な樹種の植生に適しており、葉山町のスギ造林の成功例も認められる。植生は薪炭林、オオシマザクラ、シロダモ、マテバシイ、モチノキ等である。

### 2.2 主として台地・低地地域の土壌(農地土壌)

#### 2.2.1 未熟土

##### 2.2.1.1 砂丘未熟土

この土壌は、主に東京湾に接する横須賀市南部から三浦市にかけて細く帯状に分布している。腐植含量は「有り乃至含む」程度である。土性は砂質で、深い土層からできている。土地利用は一部農地となっているが、ほとんどが海岸線にあるため、夏季はレジャーランドとして利用されている。

#### 2.2.2 黒ボク土

##### 2.2.2.1 厚層多腐植質黒ボク土

この土壌は三浦半島南部台地上の横須賀市と三浦市に主として分布している。腐植含量は、断面のほぼ全層が「頗る富む」(10%以上)の状態である。表土の土性は壤質で深い土層からできている。土壌の母材は富士火山灰であり、磷酸吸収力が大きいほかは理学的性質が良好であることに特徴がある。土地利用は薪炭林地を除くほとんどが農耕地であり、夏季はスイカ、秋季から冬季にかけてはダイコンとキャベツが栽培され京浜市場に出荷されている。

##### 2.2.2.2 厚層腐植質黒ボク土

この土壌は、三浦半島南部の台地上に主として分布している。腐植含量は断面のほぼ全層が「富む」(5~10%)の土壌に属しており、表土の土性は壤質

で深い土層からできている。土壤の基本的性格と土地利用状況は厚層多腐植質黒ボク土と同様である。

#### 2.2.2.3 表層多腐植質黒ボク土

この土壤は、三浦半島南部の台地上に主として分布している。腐植含量は表層が「頗る富む」(10%以上)土壤に属しており、表土の土性は壤質で深い土層からできている。土壤の基本的性格と土地利用状況は厚層多腐植質黒ボク土と同様である。

#### 2.2.2.4 表層腐植質黒ボク土

この土壤は、三浦半島南部のほぼ平坦な台地上に分布している。腐植含量は表層が「富む」(5~10%)土壤に属しており、表土の土性は壤質で深い土層からできている。土壤の基本的性格と土地利用状況は厚層多腐植質黒ボク土と同様である。

#### 2.2.2.5 淡色多湿黒ボク土

この土壤は、鎌倉市西部地区の神戸川流域に分布する低湿土である。腐植含量は表層が「含む」(2~5%)程度で、表土の土性は粘質であり、下層は強粘質土壤からできている。土壤の母材は火山灰であり、土地利用は水田の場合が多い。



三浦半島南部、台地(台地面は、三崎面、M2面)に広がる野菜畑で表層多腐植質黒ボク土、三浦市下宮田、作物 ダイコン(昭和59年)

## 2.2.3 褐色森林土

### 2.2.3.1 細粒褐色森林土

この土壌は、三浦半島の北部から中部にかけて丘陵地域に分布している。腐植含量は、表層が「含む」(2~5%)土壌で、表土の土性は強粘質である。土壌の母材は水成岩であり、化学的性質は良好であるが、土層の排水が悪く理学的性質が劣っている。土地利用は畑地が主体である。

## 2.2.4 褐色低地土

### 2.2.4.1 中粗粒褐色低地土・斑紋なし

この土壌は、三浦半島南部に分布し、灰色低地土に隣接したやや高位面に位置する乾田である。腐植含量は「含む」乃至「あり」(5%以内)であり、土性は主として壤質である。土層の特徴は斑紋を伴わない点にあり、土地利用は水田として水稻栽培のほか、田畑輪換も可能である。

## 2.2.5 灰色低地土

### 2.2.5.1 細粒灰色低地土・灰色系

この土壌は三浦半島南部地域の台地を解析する低位面に位置する乾田である。腐植含量は一般に少なく、土性は粘質、土層の排水は中位で、水稻の生産力も高い。土壌の養分含量は多く、田畑輪換も容易な土壌である。

### 2.2.5.2 中粗粒灰色低地土・灰色系

この土壌は、三浦半島南部地域に分布している。土壌の特徴は土性が粗粒質であることであり、それ以外は細粒灰色低地土・灰色系土壌と同様である。

### 2.2.5.3 礫質灰色低地土・灰色系

この土壌は三浦半島南部地域に分布している。土壌の特徴は30~60cm以内から砂礫層が現われることである。表土の腐植含量は「含む」(2~5%)程度であり、土性は粘質である。土壌の性格と土地利用は細粒灰色低地土に類似するが、畑利用の場合には有効土層が浅い点に配慮が必要である。

### 2.2.5.4 灰色低地土・下層有機質

この土壌は三浦半島南部の台地解析面にある低地の湿田である。土壌の特徴は表層が灰褐色土層で、下層に黒泥層またはグライ層をもつ低湿な断面からできていることである。水稻の生産力はやや劣り、また水田を畑利用する場合には土層の排水を促すことが重要である。



## 2.2.6 グライ土

### 2.2.6.1 細粒強グライ土

この土壌は三浦半島の北部から南部にかけて丘陵地または台地解析の低位面に発達している。その特徴はほぼ全層が排水不良のグライ層からできている点にある。表土の腐植含量は「含む」(2~5%)の状態であり、土性は粘質である。土地利用は水田で、水稻の生産力はやや劣る。水田を畑利用する場合には土層の排水に努めるとともに導入作物をよく選択する必要がある。

### 2.2.6.2 中粗粒強グライ土

この土壌は主に三浦半島南部地域に分布している。土壌の特徴は土性が中粗粒質であることであり、それ以外は細粒強グライ土と同様である。

### 2.2.6.3 細粒グライ土

この土壌は、三浦半島の中南部の丘陵地または台地解析面にある低地の半湿田である。土壌の特徴は表層が排水良好の灰色土層で、下層が排水不良のグライ層からできていることである。表土の腐植含量は「含む」(2~5%)程度であり、土性は粘質である。土地利用は水田が主体で、水稻の生産力は高い。水田を畑利用する場合には、排水に努める必要がある。

### 2.2.6.4 中粗粒グライ土

この土壌は三浦半島南部の台地解析面の低位面に分布する半湿田である。土壌の特徴は土性が中粗粒質であること以外は細粒グライ土と同様である。

### 2.2.6.5 グライ土・下層有機質

この土壌は三浦半島の北部と南部にある丘陵地または台地解析の低位面に発達している。その特徴は表層がグライ層で、下層に黒泥層または泥炭層をもつため土層の排水が不良なことである。土地利用は水田が主体で、生産力はやや劣る。水田を畑利用する場合は排水に努めるとともに導入作物をよく選択する必要がある。

## 2.2.7 黒泥土

この土壌は三浦半島の南部にある台地解析の低位面に発達している。その特徴は表層の上部が強粘質土で、その下部が黒泥層であり、下層に泥炭層を伴っている点にある。土壌の基本的性格と土地利用上の注意点は、細粒強グライ土と同様である。

## 2.2.8 人工改変土

### 2.2.8.1 人工改変台地土

この土壌は、自然条件下で発達した土壌が、主として昭和30年以降の高度経済発展期以後に人工的に改変されたもので、台地または丘陵地の高位面に存在するものをいう。

### 2.2.8.2 人工改変低地土

この土壌は、人工改変台地土と同様であるが、その分布が沖積平野または海岸線等低位面に分布するものをいう。

## 参 考 文 献

鎌田春海，神奈川の土壌分類と土地利用に関する研究 神奈川農研報 112  
1972.

神奈川県農業総合研究所，水田および畑地土壌生産性分級図 神奈川県三浦半  
島地域，昭和47年1月.

国土庁土地局，土地分類図付属資料（縮尺20万分の1）（神奈川県）  
昭和50年.

農林水産省農業技術研究所，農耕地土壌の分類，第2次改訂版 昭和58年  
3月.

農林水産省林業試験場土場部監修 森林土壌の調べ方とその性質，林野弘済会  
昭和57年.

鎌 田 春 海  
藤 原 俊六郎  
鈴 木 清  
尾 岸 諒 一  
越 地 正

## Ⅳ 土地利用現況図及び土地利用履歴図

### 1 土地利用概説

三浦半島地域では、小高い山々や丘陵が海岸まで迫り陸の交通は不便であった。江戸と上方を結ぶ海上交通の中継点として、三崎港をはじめいくつかの良港が繁栄した。

海岸と小河川の流域にある沖積低地は水田となり、その開発は江戸時代にほぼ終わった。また台地の上の平坦地は、古く三浦木綿<sup>もめん</sup>の産地として有名であったが、江戸時代には三浦大根の産地に変わった。

明治中期以後、横須賀線や京浜急行などの鉄道が開通すると、三浦半島は農業型開発から都市型開発へと変わりはじめた。

さらに近年、京浜急行が三浦半島の南部まで延長され、横浜―横須賀高速道路が開通するにおよんで、この地域は首都圏の一面に編入され、ベッドタウン化が進んでいる。

古くから開発のすすんだ地域では小規模な開発の積み重ねの結果、沖積低地では谷の奥まで住宅が立ち並んでいる。

現在の三浦半島の土地利用を概観すると、鎌倉・逗子・葉山・横須賀を中心とした住宅地域、鎌倉北東部、横浜南部、横須賀東部を中心とした工業地域、三浦半島中央を北西から南東に分布する針葉樹林・広葉樹林地帯、横須賀港を中心とした防衛施設地域、半島南部の農業地域、三崎港を中心とした遠洋漁業地域に大別することができる(図5)。

鎌倉・逗子・葉山の海岸および三浦海岸は、夏は海水浴場として賑わう。鎌倉には多くの歴史ある寺社があり、正月には初詣の客で賑わいを示す(図6)。東京から40~60kmの近距離にあるため日帰り客が多く、宿泊率は3.7%と神奈川県平均7.3%の半分以下である。

図5 三浦半島土地利用概略

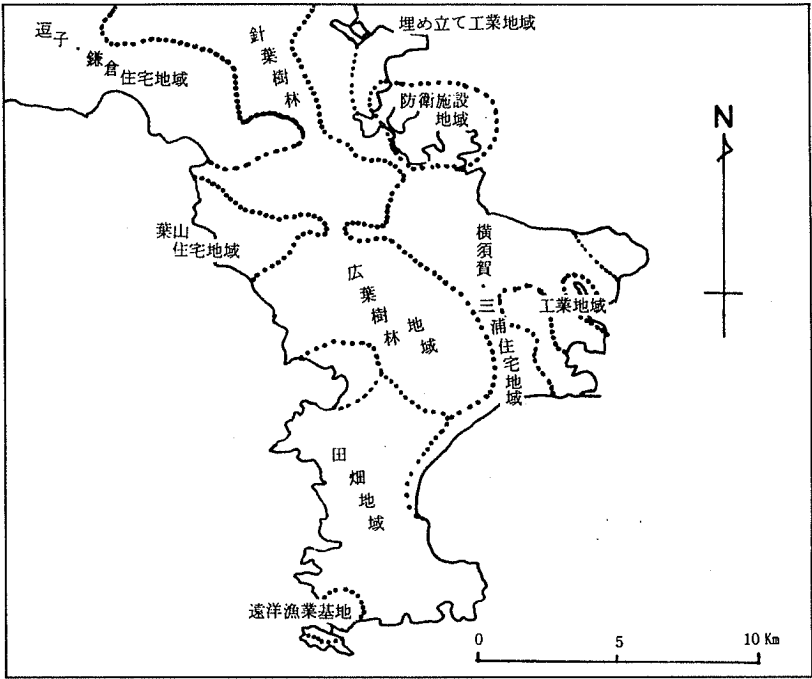
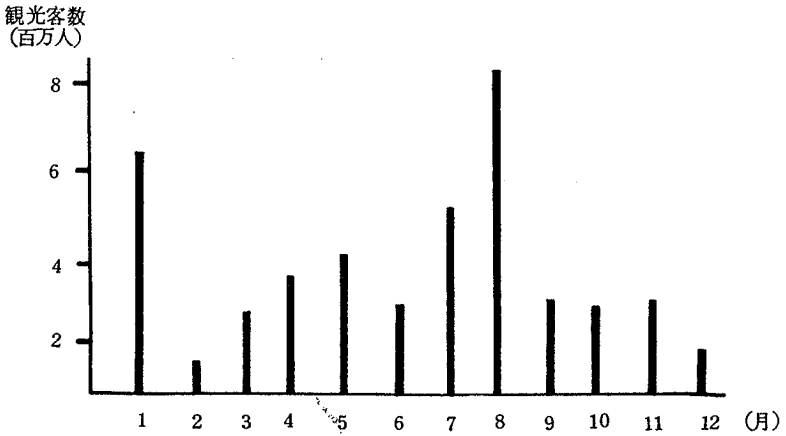


図6 三浦半島月別観光客数（昭和59年）



## 2 土地利用細説

### 2.1 田・畑

図幅北西部を東から西へ流れる柏尾川<sup>かしお</sup>や逗子市を東から西へ流れる田越川<sup>たごえ</sup>などの流域の沖積低地には、かつて水田や畑地があった。

三浦半島の中央を南東へ流れる平作川<sup>ひらさく</sup>の沖積低地も戦前まではほとんど水田であった。

これらの地域は、現在ほとんど一般住宅で埋まっています。水田や畑が微かに残っているにすぎない。これに伴い、一部の地域では、大雨のとき水害に見舞われるようになり、河川の改修工事が進められている。

南部地域、小和田湾へ注ぐ川間川<sup>かわま</sup>など小河川によって形成された沖積低地には水田が広がり、台地の上の平坦面は畑地となっている。畑では、夏はスイカ、冬はダイコン、春秋はキャベツが露地栽培され、我国有数の野菜生産地となっている。ここでは、現在も専業農家が6割以上を占め、経営規模も大きい。

### 2.2 樹園地

中部地域の武山の南斜面を利用して、みかんの栽培がおこなわれている。

### 2.3 針葉樹・広葉樹

鎌倉市・逗子市・横須賀市の丘陵や山地は、かつて広葉樹や針葉樹で覆われていた。しかし、大規模な宅地開発がおこなわれた結果、現在は鎌倉・逗子の東部、横須賀の西部の山地に微かにその面影を残すにすぎない。鎌倉東部の山地には、鎌倉霊園が造成された。

中部地域の大楠山を中心に広葉樹・針葉樹で覆われた山地と丘陵が北西から南東に広がっている。このあたり一帯は、三浦半島で広葉樹林、針葉樹林が最も良く残されている地域である。

南部地域では、岩堂山<sup>いわどう</sup>を中心に広葉樹林が分布する。また、波蝕台地と沖積低地の間の斜面にも広葉樹林が分布する。

### 2.4 道路

相模湾と東京湾を結ぶ高速道路として逗葉新道が昭和45年に開通し、また

三浦半島を縦断する横浜―横須賀道路が昭和59年に南側は衣笠インターまで開通した。この道路の開通により、三浦半島は、国道1号線あるいは東名高速道路に直結し、今後の三浦半島の発展が期待される。横須賀―三崎線、葉山―久里浜線は、第二次世界大戦中、軍用道路として整備拡充されたもので、現在産業道路として半島の交通の根幹をなしている。

## 2.5 中高層住宅地

高層住宅は、再開発の結果として建設される場合と、新しい造成地に建設される場合とがある。図幅北西部、鎌倉七口の一つ大仏坂から柏尾川の沖積低地に至る丘陵の北縁に中層住宅が建ち並んでいる。これは、この付近の20数社の社宅や寮の集合である。

鎌倉市材木座海岸の南東の18haの埋め立て地には、高層リゾートマンションとヨットハーバーが建設されている。図幅北東端平潟湾北岸の沖積低地にある東急車輛工場の一部敷地には、高層住宅群が建設されている。京浜急行は堀の内まで三崎口行きと浦賀行きに分かれるが、その線路にはさまれた地域にかけて大津刑務所が有ったが、刑務所は久里浜の埋め立て地に移転し、その跡地に高層住宅と学校ができた。浦賀湾の湾口東方の埋め立て地には、昭和48年神奈川県営の高層住宅団地が建設された。

昭和41年に京浜急行電鉄が久里浜から三浦海岸まで延長されると、三浦海岸は京浜地域の通勤圏に組み込まれ、ベッドタウン的性格が強まった。京浜津久井駅周辺の広葉樹林の丘陵は、高層住宅地湘南長沢グリーンハイツに変わった。

昭和50年になると京浜急行電鉄は、さらに三崎口まで延長され、三浦海岸駅の西側には、昭和50年の県営上宮田団地の建設が契機となって、三浦海岸ハイツなどの高層住宅群が建設されている。

## 2.6 一般住宅地

明治22年、東海道線大船駅と横須賀軍港を結ぶ交通機関として、横須賀線が開通した。これを契機とし、鎌倉・逗子など風光明媚な湘南海岸に面した沖積低地は、高級住宅地および別荘地として開発され、その開発は次第に谷の奥へと進んでいった。東京湾岸では、昭和5年、京浜急行電鉄が浦賀まで開通し



谷の奥へすすむ住宅開発、背後は三浦丘陵（三浦層群よりなる）  
横須賀市船越町（昭和59年）

その沿線の住宅開発が進んだ。沖積低地の宅地開発が限界に達すると、沖積低地に面した丘陵の斜面にまで、小規模な開発が無計画に積み重ねられた。

昭和40年代に入ると、宅地開発が盛んにおこなわれるようになり、鎌倉・逗子・横須賀の丘陵や山を覆っていた広葉樹林は次々に開発されて団地に変わった。これらの地域は、現在、住宅地域の方が広葉樹林よりはるかに大きな割合を占めるようになった。馬堀海岸には60haの埋め立て事業が実施され、横須賀市の中心市街地整備計画にもとづき、港湾・漁港・工場・住宅の混在地区解消のための代替地として確保されている。

葉山町は明治中期に、ドイツ人医師ベルツ博士によって、温暖な気候と緑豊かな自然に恵まれていることが全世界に紹介され、明治27年には、御用邸が建設された。その後、別荘地、保養地として発展し、現在では、高級住宅地化が進んでいる。三浦半島中央部、平作川の南側の矢部から野比にいたる丘陵地では、昭和40年代の後半から、丘陵を切り崩し、面積115haの一般住宅地湘南ハイランドが生まれた。

## 2.7 工場用地

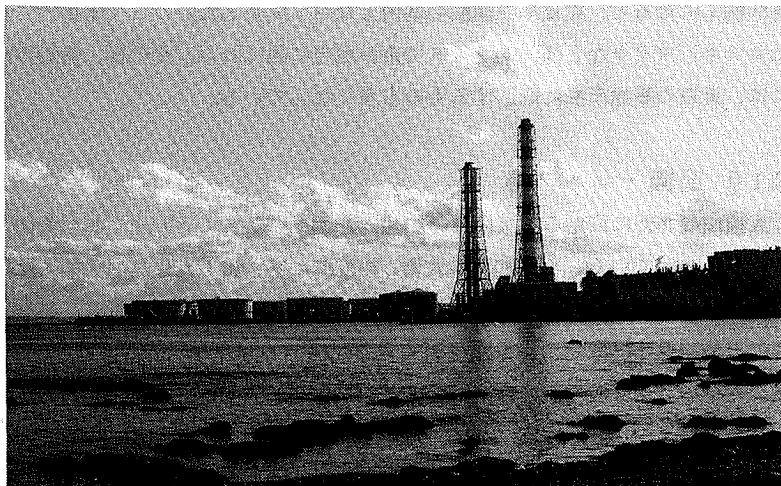
図幅北西端の工場群は、京浜工業地帯の拡大に伴って、戦前から柏尾川の沖積低地に建設されているもので、建設当時は水田の中に散在していた。現在は、まわりの水田が住宅地に変わったため、住宅密集地の中に工場が分布するようになった。図幅北東端の東京湾岸の工場用地は、明治末期以来の埋め立てで形成された。かつては、海軍とその関連企業の施設用地として使用されていた。

現在は、日産自動車とその関連企業の工場用敷地となっている。この隣には、浦賀から主力を移した住友造船所がある。

国鉄久里浜駅の北西、平作川の沖積低地に広い工場用地が分布する。ここは、かつて水田であったが、横須賀市によって工業団地に指定され、昭和35年頃左岸へ企業進出が始まり、遅れて昭和40年ごろから右岸へ鉄鋼関連企業が進出し、鉄鋼団地となった。

久里浜湾の南側の71haの埋め立て地には、昭和35年東京電力が総発電量263万KW、当時世界第1位の火力発電所を建設した。

三浦半島の南端では不振の三崎漁港に活を入れるため、昭和35年、城ヶ島北岸を埋め立てて、水産加工工場の誘致をはかった。三崎新港には超低温冷蔵庫を整備するなどの努力が続けられている。



埋め立て地の火力発電所、東京電力横須賀火力発電所、久里浜（昭和60年）



## 2.8 商業用地

国鉄横須賀線や京浜急行の駅の周辺に、商業用地が分布する。特に、背後に多くの文化財をひかえ、古都鎌倉の玄関口となっている鎌倉駅周辺、戦前・戦後を通じ基地の街として発展してきた横須賀市街地、背後に関東学院大学や、日産自動車・住友造船所などの工場を持つ京浜急行追浜駅周辺には大きな商店街が形成されている。

## 2.9 運輸・流通施設用地

東京湾に面した日産自動車追浜工場の東側に新しく造成された埋め立て地は自動車輸移出岸壁で、多くの自動車が待機している。軍港である横須賀本港の東側に、昭和49年7haの埋め立てがおこなわれ、貨物置き場と横須賀新港ができた。新港の取り扱い貨物の大半は自動車で、北米やヨーロッパ方面に輸出されている。

三浦半島南端の三崎港は、江戸時代には江戸と上方を結ぶ海上交通の要所として番所が置かれ、帆船時代には避難港、風待ち港として利用された。大正12年に岸壁、魚市場が整備されてからは、主に西日本の漁船に利用されていた。やがて、漁船が大型化し、太平洋、インド洋さらに大西洋を漁場とする遠洋漁業が盛になると、東日本の漁船の基地となって成長した。ここで水揚げされたカツオ、マグロなどは、トラックで京浜地方に運ばれた。その後、漁船の中には、東京の築地市場に直送するものも多くなっている。

### 2.10 公園・ゴルフ場

大楠山の北方に広がる広葉樹林の山地は、切り開かれて36ホールの葉山ゴルフ場となっている。小田和湾の北側、相模湾に突き出した佐島の先端<sup>きしま</sup>には、ハマユウの自生北限地<sup>てんじん</sup>の天神島がある。殊に、200m沖の笠島一帯は、神奈川県<sup>てんじん</sup>の天然記念物に指定され保護されているため、ハマユウ、ハマボウ、トベラ、ハマカンゾウの海浜植物や タツノオトシゴ、ウツボ、ウニなど磯の生物の宝庫となっている。

小網代湾、油壺一帯は、おぼれ谷の発達したリアス式海岸で、年間120万人の観光客が訪れるマリナーパークや熱帯植物園がある。

城が島は隆起海食台、海食崖、岩礁などの自然景観に富み、島の東部台地の  
上は自然公園として整備され、ウミウの生態なども観察できる。

鎌倉鶴岡八幡宮は、正月には多くの参拝客で賑わう。鎌倉市には、この他、  
鎌倉大仏、長谷観音、建長寺、瑞泉寺など多くの名所旧跡がある。

### 2.1.1 教育文化体育施設

宅地開発が進み、人口が増加するのに伴って、小学校・中学校・高等学校が  
各地に建設された。図幅北東端、平潟湾北西の沖積低地には、広葉樹林の丘陵  
を背に横浜市立大学がある。また、平潟湾の南方の埋め立て地には、関東学院  
大学がある。鎌倉鶴岡八幡の東隣りの横浜国立大学附属鎌倉小学校の付近は、  
1180年から64年間、鎌倉幕府が置かれたところである。観音崎の西側台地  
の70haの敷地に、昭和30年、防衛大学校が久里浜から移転してきた。相模  
湾に面した小和田湾の埋め立て地には、立教大学の原子力研究所がある。また、  
油壺湾に臨む半島の先端には東大臨海実験場がある。

鎌倉市<sup>いりやまず</sup> 田、横須賀市<sup>いげこ</sup> 不入斗、逗子市池子など各地に大規模な運動公園が建  
設されている。

### 2.1.2 防衛施設用地

東京湾に面した横須賀本港は、かつて首都東京防衛の海軍基地として発展し  
たが、第二次大戦後、旧海軍施設は米軍基地として提供され、現在は大型空母  
や原子力潜水艦の寄港地となっている。横須賀の米軍基地は229haで、横須  
賀市中央部臨海低地の大部分を占めている。逗子市から横浜市にかけて広がる  
丘陵部に米軍の池子弾薬庫がある。総面積は288haにおよび、昭和47年に  
一部返還されて、運動公園となった。

南部地域の小田和湾は、一部埋め立てられその3分の2は陸上自衛隊武山  
駐屯地および自衛隊少年工科学校用地として利用されている。長井<sup>ながい</sup>南部の台地  
の上には、総面積29haにおよぶ米軍の長井ハイツ（住宅）がある。

### 2.1.3 海 浜

相模湾に面した鎌倉、逗子、葉山等湘南海岸は、海水浴場として全国的に有

名で、夏は賑わいを示す。また、東京湾岸の三浦海岸も京浜急行電鉄の開通により、年間300万人をこえる海水浴客を集め、湘南海岸と並ぶ新しい海水浴場に成長している。

### 3 土地利用履歴

当図幅地域の土地利用の変化は、有史以来沖積低地は水田として、台地の平坦面は畑地として徐々に進んだ。明治以降になると、その開発は従来の農村型開発から都市型開発に変わり、水田や畑地は工場用地や住宅用地にと次第に変化した。昭和30年代後半になるとその変化が急激になった。

昭和39年の人口を100として、各市町の人口の増加を比較すると10年後の昭和49年に鎌倉市は162、逗子市140、横須賀市は132、葉山町148、三浦市118で、昭和59年には、鎌倉市178、逗子市146、横須賀市149、葉山町185、三浦市127であった。この数字は、次のことを示す。鎌倉、逗子、横須賀は昭和40年代に住宅開発が大きく進み、特に鎌倉の増加率は大きかった。しかし、昭和50年代に入ると、開発の余地も少なくなって、その増加率は減少した。ただ、葉山町は、昭和40年代、50年代ともほぼ同じ高率で増加している。これは葉山町が広大な広葉樹林、針葉樹林からなる山地を背後に控え、恵まれた自然環境を保有しており、住宅開発の余地があるためである。また、三浦市は、これまで、交通の便が悪かったため、昭和40～50年代を通じて人口の増加率は他の地域に較べあまり大きくなかった。

土地利用履歴調査は、昭和49年と59年の土地利用の変化を調べたもので鎌倉、横須賀地域については、開発のピーク後のため、予想された大きな一般住宅地の増加は地図には現われなかった。北西部の丘陵地で、一般住宅地への変化が見られるのは、昭和49年時点で宅地造成地であったところへ、住宅の建設が進んだもので、この地域には、昭和46年に大船～江の島間のモノレールが開通している。

東京湾岸の京浜急行沿線について見ると、北部地域では、住宅開発は丘陵地をさらに奥へ進み、市街地では高層住宅化など再開発が進んでいる。造成された埋め立て地は自動車などの輸出のための埠頭や移出地として利用されている。

南部地域では、台地の上の畑が宅地造成され一般住宅地が変わっている。埋

め立て地も、住宅地として利用されている。

高速道路、横浜－横須賀道路は、現在半島中央部の衣笠インターが終点であり、京浜急行は三崎口駅が終着駅となっている。これらの道路や鉄道は、今後さらに延長される計画があり、この地域の発展のため、期待が寄せられている。

かって、豊かな緑で代表された三浦半島が、今後残された緑を生かして、調和のとれた発展を遂げるために、総合的、計画的な土地利用が必要である。

## 参 考 資 料

- 神奈川新聞社，1983．航空写真集 空からかながわ，153-184．  
三浦半島地域特性・課題研究プロジェクトチーム，1980．三浦半島地域特性  
・課題研究報告書，163．  
神奈川県，1985．かながわ'84－県勢要覧昭和59年度版，476．  
神奈川県，1975．かながわ'74－県勢要覧昭和49年度版，409．  
神奈川県，1965．かながわ'64－県勢要覧昭和39年度版，352．  
神奈川県，1985．神奈川の米軍基地，30．  
トラベル・メイツ社，1979．神奈川県風土記 美しいふるさと，191．  
神奈川県企画調査部，1968．空からみた神奈川の10年  
野村正七，1982．神奈川県の自然と社会（空中写真集），日本地図センター  
神奈川県県民部県史編集室，1980：神奈川県史 通史編4-7，  
近代・現代(1)～(4)  
寺下正康，1980：空から見た横浜・鎌倉，交通公社，255．  
明細地図社，1983．横浜金沢区明細地図  
" ，1984．横須賀市（東部・西部・中央部・北部）明細地図  
" ，1983．逗子市・葉山町明細地図  
" ，1983．鎌倉市（南部・北部）明細地図  
" ，1983．三浦市明細地図

長 瀬 和 雄  
小 鷹 滋 郎  
杉 山 茂 夫  
大 木 靖 衛

## V 自然災害履歴図

### 1 自然災害履歴概説

本稿では、自然災害として、地すべり、崖くずれ及び浸水を扱う。地震による津波、液状化などの災害もあったが、詳細な資料を集めることができなかったため、ここには記載しない。

地震や集中豪雨あるいは、台風の来襲により山地や丘陵では、斜面が崩壊したり、沖積低地では、地盤の液状化、津波、洪水が起きたりして、多くの財産や貴重な人命が失われる。

斜面の崩壊は、災害という視点から見ると地すべりと崖崩れに大きく二分することができる。

地すべりは、大地が粘土層などからなる明白なすべり面を持って、徐々に移動を始めるもので、その運動は緩慢で継続的である。地すべりは、運動が一時止まっても、再び活動し、それがくり返される。また、地すべりは、特殊な地質条件を持つ地域でしか発生しない。それらの地域で開発などにより、人為的要因が加わると、地すべりはさらにおきやすくなる。人為的要因としては、次の事項が考えられる。

#### ① 自然林の伐採と表土の削剥

雨水が地下へ浸透しやすくなる。

#### ② 宅地造成などによる切り土や盛土

斜面の応力と抵抗力のバランスがくずれる。

#### ③ 谷部への盛土

排水工事が不充分のまま、自然の水路である谷部へ盛土すると、盛土の中へ地下水が集中する。

また、台風や集中豪雨あるいは長雨など大量の降雨は、地すべりを促進する。

崖くずれは、地震や豪雨の直後などに斜面の急激な崩壊として発生する。風化によって軟弱化した岩塊が、斜面を大きな速度で落下し、その後は安定化する。崖くずれは、緩慢で継続的な運動を示す地すべりとは区別して取りあつかっている。崖くずれの発生する自然的素因としては、表土や崖錐堆積物の分布状態、基盤岩の風化の度合、節理・小断層の発達程度、斜面の形状や植生の状

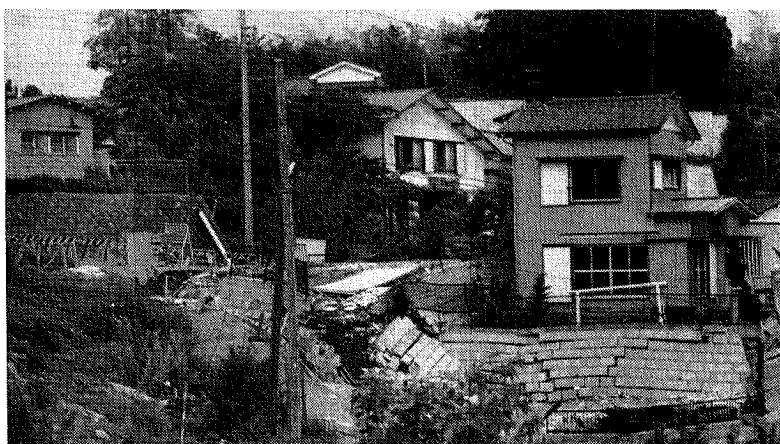
態など地表付近の局部的要因によるのが特徴といえる。崖くずれは地すべりと異なり、斜面であればどこでも発生し、地すべりのように特定の地質条件と、特に深い関係を示さない。

## 2 自然災害履歴細説

### 2.1 地すべり

昭和30年代後半になって、それまでは山林や畑として利用されてきた地域が、急速に宅地化されたのに伴って、地すべりが発生するようになった。横須賀市の阿部倉、平作地域の地すべりは、その典型的な例である。さらに、この地域に隣接する小矢部、金谷地域にもやや小規模な地すべりが発生している。

これらの地域は、大楠山山地の北斜面にあたり、緩斜面が発達するところである。基盤の岩石は葉山層群の衣笠層である。衣笠層は凝灰岩ならびに凝灰質泥岩からなる地層で、特にこの付近では蛇紋岩の貫入岩体、あるいはその再堆積した堆積物を含む。本層には無数の節理、小断層が発達する。また、地下水位が高く、湧水個所が多い。この節理や小断層の存在は雨水による風化を促進する。凝灰質岩や蛇紋岩は風化するとモンモリロナイト等の粘土鉱物が形成される。この粘土に雨水が浸透すると軟弱化して、緩傾斜面に沿ったすべり面が



地すべりによる擁壁等の被害状況、横須賀市阿部倉（昭和49年）

生じやすくなる。

このような自然的素因を有するところに、宅地開発などによる人為的誘因が加わり、地すべりが発生する。

阿部倉の地すべりは大局的にみて4か所にわたっており、最も大きなものは長さ100m、幅50m、深さ10mに達するものである。平作の地すべりで大きなものでは長さ70m、幅90m、深さ4mほどである。地すべりによって、家屋や建造物に大きな被害が生じるにいたり、昭和50年に、両区域とも地すべり防止区域の指定を受け、対策工事がなされた。その結果、地すべりは停止した。

金谷の地すべりは長さ50m、幅60m、深さ5mなどの規模で、家屋に被害を与えた。昭和52年頃に対策工事がなされた。小矢部地区では地すべりの兆候が認められたため、ボーリング調査をしたところ、深さ5～6mのあたりに、地すべり面がみいだされた。

葉山町の滝坂峠付近も過去において地すべりを起こした。この地域は、西北西—東南東走向で傾斜が垂直な断層破碎帯の分布域で、厚さ約2mの断層粘土が形成されている。さらに蛇紋岩が弱線部に沿って分布している。断層によって破碎された森戸層の凝灰岩、泥岩ならびに蛇紋岩は、浸透した雨水により粘土化が進み、地すべりが生じた。滝坂峠を通る県道の拡張のため、斜面の脚部を切土したことなどにより、地盤の安定が失われ、地すべりが進行した。昭和43年頃に、脚部を押しつけるような恰好でトンネルが建設された結果、地すべりは停止した。

葉山町滝坂峠から木古庭<sup>きこば</sup>付近までの葉山ゴルフ場の北側にはかなり広い緩傾斜面が分布する。この斜面の基盤が崩壊堆積物が覆う。湧水が各所にみられ、断層の影響を受けて基盤が風化して軟弱化している可能性がある。この付近一帯は、地すべり地形を呈している。

横須賀市秋谷の地域は、急傾斜面では崩壊が進行しており、緩斜面では小規模ではあるが、かつて地すべりが発生したところである。この地域の基盤は滝坂峠におけると同様森戸層である。基盤が強く風化し、地すべりが発生したとみなされる。

以上の地域のほかに、地すべりが起こったところを図(自然災害履歴図)に示してある。地すべりが発生したのは、いずれも崩壊堆積物に覆われた緩傾斜

面であり、小断層や節理の多く発達した凝灰岩や泥岩の基盤が存在する地域である。

## 2.2 崖くずれ

三浦半島には谷戸が多く、狭く、奥まっているうえに、急斜面がめぐらされていて、ときにオーバーハングした急崖となって住宅地にせまっている。それだけに、崖くずれが発生した個所、あるいは将来発生する可能性のある個所が多く、急傾斜地に指定されているところも少なくない。

三浦半島における崖くずれのタイプとして、①基盤岩の風化物礫を含む比較的薄い表土が、基盤との境をすべり面として植生とともに滑落、②崖錐性堆積物が基盤との境の面をすべり面として滑落、③崖錐性堆積物の崩落、④ロームの崩落、⑤ロームが基盤岩との境の面をすべり面として滑落、⑥埋土の崩落、⑦埋土が基盤岩との境の面をすべり面として滑落、⑧基盤岩の崩壊、などが認められる。

三浦半島では、宅地造成の少ない山地を除く中央部、北部にあたる横須賀市、逗子市、鎌倉市に崖くずれが多い。この地域では標高50mから100mの丘陵の谷部、斜面下、斜面部、あるいは上面まで宅地化が進んでいる。本地域に最も広く分布する基盤岩は、三浦層群の逗子層で、斜面の表層堆積物は、基盤岩に由来する泥岩礫とロームとが混在する崖錐性堆積物ならびに有機質の風化土壌からなる表土である。基盤岩の逗子層は、節理、小断層が発達していると地下水の浸透、粘土化が進み、また、層理面に沿って分離しやすくなる。

この地域において発達する崖くずれの多くは、前述のタイプ①および②である。いずれも豪雨の際、著しく透水性に富んだ風化角礫岩ないし崖錐性堆積物が、透水性に乏しい基盤の逗子層の表面に沿って、水とともに流出するもので、基盤面が斜面勾配と一致している崖で最も多く発生している。また、崖錐性堆積物や表土は、分布が不規則であるが、一般に凹地で厚く、崖錐性堆積物は厚さ5～6mに達するところもある。降雨の集中する凹地に分布することと、崖錐性堆積物や表土自体が軟弱であるため、大雨が降ると安定性を失い土石流となって斜面を流下する。

以上とは別に、この地域でしばしば問題になる崩壊のタイプに⑧がある。こ



これは、基盤の返子層の層理面に沿って岩盤が崩落するもので、その発生は、返子層（泥岩）の分布する鎌倉、返子、横須賀地域に最も多い。節理面や層理面に沿って地下水が浸透しやすく、これらの面に沿って、地層の風化、変質が進む。浸透水によって地層の間隙水圧が微妙な影響を受ける。そのため、豪雨などのおり、岩盤が節理面、堆積面に沿って、大小の岩塊となって崩落するもので、返子層、特に泥岩と砂岩の互層がよく露出する返子市山ノ根で、この種の崩壊が目立ち、その対策が強力に進められている。鎌倉市内では、この種の崩壊によって犠牲者の出たことが報告されている。

横須賀市の小原台や三浦市の宮田台地、三崎町の台地では、斜面崩壊の発生頻度が小さい。この地域では住宅の密集化が、中央部や北部ほど進んでいない。これらの台地は標高30~60 mで、関東ローム層が5~8 mの厚さで分布する。その下位には未固結の砂層や砂礫層を主体とする小原台層や三崎層が分布する。基盤岩として三浦層群の返子層及び三崎町層が主体である。関東ローム層は風化すると節理が生じやすく、軟弱化しやすい。したがって、この地域にはタイプ④のロームの崩落ならびに基盤岩の風化を伴うタイプ⑤のローム層の滑落などによる崖くずれが発生している。しかし、谷戸が少なく、地形が緩やかであること、切り取り斜面が比較的少ないことなどによって、崩壊の頻度が小さい。

台地や丘陵の上面や斜面に宅地造成をした際、削りとった表土や基盤の岩屑を斜面や谷に落した捨土や埋土が崩落、滑落（タイプ⑥、⑦）した例がある。その頻度は小さくなく、開発に伴う人為的災害として注目すべきものといえよう。

## 2.3 浸 水

昭和49年7月7日夜半から8日にかけて、台風8号の接近にともなう梅雨前線の活発化により、神奈川県南部に集中豪雨もたらされた。豪雨発生日の7日7時より8日9時までの雨量は、横須賀市で最高の238mm、鎌倉市で、169mm、三浦市で62mmを記録した。

昭和57年9月10日に、本州の南岸に接近した台風18号により、秋雨前線が活発化し、横浜から江ノ島にかけて、強い雨が降った。10日の日雨量は、江ノ島で最高の116mmとなった。10日から12日までの総雨量は、山間部

で400~500mm、平野部で200~300mmに達した。

これら兩台風の襲来に伴う大雨によって、河川の氾濫による家屋への浸水、田畑の冠水、流失ならびに斜面崩壊による被害が多く発生した(表8参照)。

昭和49年の台風8号時の各地域の雨量と昭和57年の台風18号時のそれとを比較してみると、各地域ごとの雨量も比較的似ている。そこで、兩台風時の浸水の個所を自然災害履歴図に示し、それらに基づき浸水の履歴を考察した。

三浦半島において、兩台風時の大雨により氾濫し、家屋の浸水などの被害を与えた河川は、鎌倉市と藤沢市を流れる柏尾川、鎌倉市を流れる滑川、逗子市を流れる田越川、横須賀市を流れる平作川である。

柏尾川沿いでは、昭和49年の台風8号時の浸水域が、昭和57年の台風18号時のそれよりかなり広い。出水個所はともに図幅外の国鉄大船駅の約500m南西の戸部橋付近ならびに約4km南の鎌倉市梶原町古川と藤沢市宮前町前との間にかかる古館橋付近である。前者の地域では、水路を直線的にするための改修工事がほぼ終わっているが、地盤が全体として低いとため、大雨などにより増水すると浸水しやすい。後者の地域は、柏尾川の流路がほぼ直角に曲がっているところに位置していることから、浸水の起こりやすい地域といえる。

平作川流域では、昭和49年の台風8号襲来時は広範囲にわたり浸水が発生した。しかし、昭和57年の台風18号の豪雨ではほとんど浸水が起らなかった。これは、昭和51年から大規模に開始された河川改修工事が功を奏したものと見えよう。

河川の流域のほかにも浸水の生じた個所が数か所あるが、それらは周辺より低地で、排水路などからすぐ水があふれでるところである。また、丘陵や台地の斜面を造成してつくられた比較的大きな住宅街では、降雨が地下にしみこまずに地表を流れ、そのため、低所にある家屋に浸水する事例がいくつか報告されている。そのような住宅街では、遊水池が設置されているが、豪雨の際にはその容量が小さく、十分な洪水調節の機能が果されなかったとされている。

表8 昭和49年台風8号，昭和57年台風18号時の被害

| 市名   | 年度 | 床上浸水  | 床下浸水  | 斜面崩壊 |
|------|----|-------|-------|------|
| 三浦市  | 49 | 10棟   | 145棟  | 0カ所  |
|      | 57 | 0     | 32    | 20   |
| 横須賀市 | 49 | 2,008 | 3,892 | 260  |
|      | 57 | 26    | 172   | 17   |
| 葉山町  | 49 | 0     | 13    | 2    |
|      | 57 | 4     | 13    | 2    |
| 逗子市  | 49 | 0     | 40    | 9    |
|      | 57 | 120   | 199   | 4    |
| 鎌倉市  | 49 | 20    | 560   | 1    |
|      | 57 | 526   | 426   | 37   |

参 考 資 料

神奈川県環境部，1982． 昭和57年台風18号による被害と対策． 神奈川県，  
24．

神奈川県横須賀土木事務所，1982． 阿部倉地すべり，7，43．

———，1982． 平作地すべり，44．

見上敬三，1975． 鎌倉市の崩壊斜面の実態と対策，鎌倉市，1-14．

横須賀地区災害調査研究グループ（見上敬三ほか），1975． 横須賀地区  
災害の調査研究，昭和49年7月集中豪雨災害の調査研究総合報告書，  
昭和49年度文部省科学研究費特別研究（自然災害），11-27．

横浜地方气象台，1974． 昭和49年7月6日～8日の台風8号および梅雨前  
線による大雨に関する異常気象速報，17．

武居有恒，1981． 地すべり・崩壊・土石流，鹿島出版会，54．

安江朝光・大久保駿，1976． 崖崩れの実態とその対策，施工技術，9-8，  
73-81．

見上敬三 小池敏夫  
今永 勇 大木靖衛  
長瀬和雄

1986年3月 印刷発行

土地分類基本調査

## 横須賀・三崎

編集発行 神奈川県企画部企画調整室  
横浜市中区日本大通1  
電話(045)201-1111

印刷 あんざい  
横浜市港南区下永谷町2723-2  
電話(045)822-8497